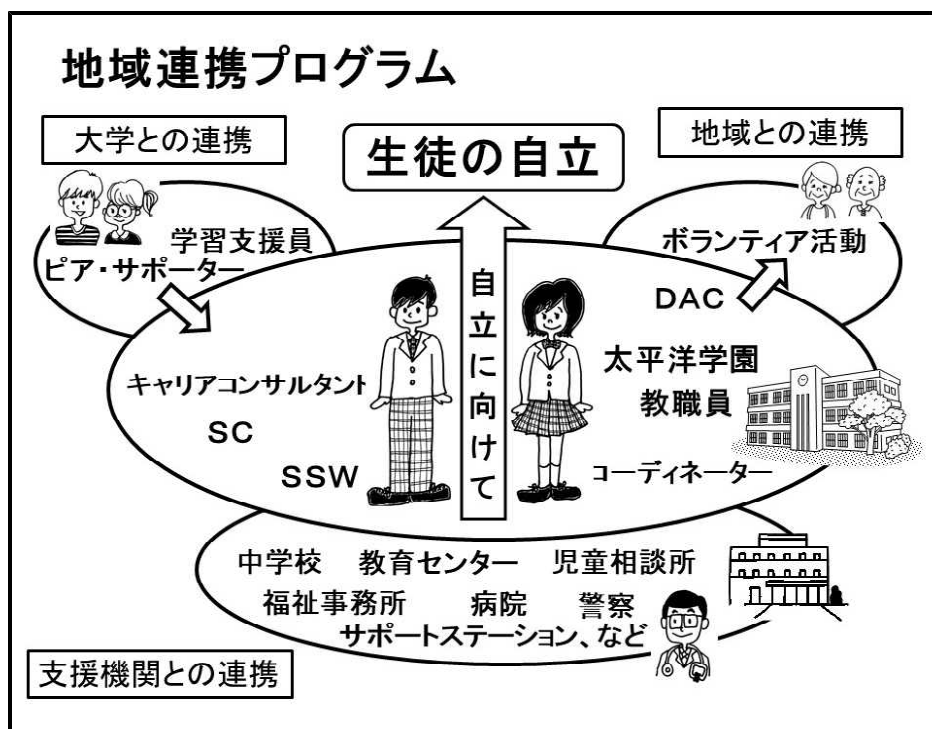


## 第4章 研究の実際〔地域連携プログラム〕



### 第1節 大学との連携 ～ 学習支援

ピア・サポート活動

### 第2節 地域との連携 ～ ボランティア活動〔DAC〕

### 第3節 支援機関との連携

## 第1節① 大学との連携 ～ 学習支援

### 1. 活動の目的

本校には、長期の不登校や別室登校などでこれまで十分な学習ができなかった生徒、特性を有しながらそれに応じた適切な学習スタイルが確保できなかった生徒等も在籍している。それらの生徒を支援するために授業での座席の場所や印刷物にルビをふるなどさまざまな配慮をしている。それらに加えて、大学院生や大学生による学習支援も行っている。具体的には、授業や補習の際に、大学院生や大学生（学習支援員）が生徒のつまづいているところを見つけ声をかけをしたり、板書内容をノートに書き写したりや授業プリントへの記入を支援したり、さらにはグループワーク等において生徒どうしをつなげたりする支援を行っている。このように「学習支援員制度」を導入し、大学院生や大学生が授業や補習のなかで、生徒の学びをサポートする取り組みを進めている。その目的として次のようなことが挙げられる。

- (1) 授業において、「学習支援員」を導入・活用することによって、より細やかな、個に応じた指導を行い、生徒の理解の促進と学力の向上を図る。
- (2) 「学習支援員」が、よき先輩、兄・姉として生徒に関わることにより、生徒の人間関係力を高め、自らの生き方について検討する機会のひとつとする。
- (3) 多様な生徒と関わり支援することによって、「学習支援員」となった学生の心理的な成長を促し、教育や人との関わりについて検討する機会のひとつとする。
- (4) 「学習支援員」を派遣する大学との連携を強化する。

このように、支援を受ける生徒だけでなく、この取り組みを通して支援する学生にも成長して欲しいとの願いを持って実施している。

### 2. 学習支援の実際

#### (1) 学習支援員の募集と決定

県内の2つの大学と連携し学習支援員を募集・決定している。図IV-1は募集案内のポスターであり、図IV-2は募集要項である。希望者には、学習支援員が本校の学習支援の取り組みについて理解し、学習支援の目的や意義の共通理解を図り、活動への意欲を喚

**2017年度 太平洋学園高校  
学習支援オリエンテーションのご案内**



太平洋学園高等学校では2012年度より学習支援員制度を導入し、大学院生や大学生が授業や補習のなかで、生徒の学びをサポートする取り組みを進めてきました。具体的には、授業中において、学習支援員が生徒のつまづいているところを見つけ声をかけをしたり、板書や授業プリントへの記入を支援したり、さらにはグループワーク等において生徒どうしをつなげる支援をさせていただいています。さて、2017年度の授業開始にあたって、オリエンテーションを実施します。学習支援員を希望される方はぜひご参加ください。

**日時 2017年4月14日(金)**  
**15:15～16:45**

**場所 太平洋学園高等学校**

**内容 学習支援について  
ピアサポートの基礎**



募集時間  
月曜日～金曜日  
1限9:00-9:45 2限9:55-10:40 3限10:50-11:35 4限11:45-12:30  
金曜日13:15-14:55 15:05-16:45  
太平洋学園高等学校 (担当:藤田)  
〒780-0061 高知市栄田町1-3-8 電話 088-822-3584  
なお、学習支援員につきましては、学習支援員を募集している授業時間(枠)と大学院生・大学生の皆さんの希望時間とを調整した上で、決定させていただきます。

図IV-1 「学習支援員」の募集の案内

起すためのオリエンテーションを実施している。その内容は、①学校の概要の説明、②学習支援員制度の意義とねらい、③サービス・給与・事務手続き・今後の日程などであり、続けて④「学習支援員」の教職員と生徒との位置や関係、⑤コミュニケーションスキル、⑥守秘義務や留意事項の確認などの研修も併せて行っている。

## (2) 学習支援の内容

学習支援員は次の枠で前期・後期別に、大学院や大学での学習に支障のない曜日で、自らの支援に入る時間（授業や補習）を固定して活動している。その枠は、①定時制課程の授業日（月曜日～金曜日、9:00～12:30）、②通信制課程の授業日（水曜日 13:15～16:45、土曜日 9:00～12:30）：面接での支援だけでなくレポート作成の支援を行うこともある。③進学補習（金曜日、15:05～16:45）である。

学習支援員は、自分が担当する曜日と時間、科目が決まると、授業担当教員と打ち合わせを行い支援の方法や留意事項を確認している。

授業では、授業担当教員が授業している時に、机間巡視をしながら教員の指示をうまく受け取れなかった生徒へ再度個別に指示の内容を具体的に伝えたり、課題の解き方がわからない生徒を支援したり、逆に生徒からの支援の求めに応じたりしている。

そして、学習支援員は担当のする授業で支援を行った後は、図IV-3のような学習支援記録用紙に授業中に支援した具体的な内容や感じたことなどを記入し学習支援の担当教員に提出することになっている。

**太平洋学園高等学校「学習支援員」募集要項**

太平洋学園高等学校

**1 募集区分**

- (1) 定時制課程の授業における学習支援（月曜日～金曜日午前[9:00～12:30]）
- (2) 通信制課程の授業における学習支援、レポート支援等  
（水曜日午後[13:15～16:45]、土曜日午前[9:00～12:30]）
- (3) 進学補習における学習支援（金曜日午後[15:05～16:45]）

**2 業務内容**

- (1) 該当授業において、授業担当教員のサポートとして机間巡回等により生徒の学習支援を行う。
- (2) 生徒が自習学習を行う際、サポートを行う。
- (3) 所定の用紙に学習支援記録を記入の上提出する。また、年度末にレポートを作成し担当者に提出する。
- (4) 必要に応じて校内研修等への参加を求める場合がある。

**3 賃金**

- (1) 基本賃金は時間給とし、翌月18日払いとする。
- (2) 支払い方法は、銀行振込とする。  
教員免許を取得している大学院生等：2,000円  
大学生、及び教員免許を取得していない大学院生等：1,500円

**4 募集条件と留意事項**

- (1) 一人ひとりの生徒の心を大切に対応していただける方。
- (2) 生徒のプライバシーを厳守していただける方（生徒と連絡先の交換は禁止、SNS等への書き込みも禁止）。
- (3) 学習支援員はボランティアではないので、体調不良や大学の講義、就職試験等と重なっている場合を除いて、原則として学習支援を優先していただく。やむを得ず欠席する場合は、必ず事前に担当者まで連絡をすること。

図IV-2 「学習支援員」募集要項

学習支援記録				太平洋学園高等学校
西暦	年	月	日	曜日
				支援員名
授業名				担当教員名
				先生
生徒名	支援状況（生徒の学びの事実、やりとり等できるだけ具体的に）			

記入後、担当者に提出してください。

図IV-3 学習支援記録

### 3. 生徒や学習支援員の評価

#### (1) 生徒の評価

表IV-1は、生徒が学習支援員をどのように見ているかを調査したものである。生徒からみて、学習支援員とのかかわりに対する満足度は100点法で71.8であった。学習支援員は基本的に授業中につまづいている生徒を主に支援するため、授業内容についていけるために支援を受ける必要のない生徒もいる。ほぼ半数の生徒は、授業中の支援をあまり受けていないことがわかる。そんな中でも、生徒は学習支援員に親しみを持ち、ていねいに教えてくれていると感じていることがわかる。また、学習支援だけでなく、休み時間での学習支援員とおしゃべりや交流も、生徒にとっては楽しく元気をもらえる機会になっていることもわかる。ただ、積極的に学習支援員とかかわろうとする生徒もいるが、一方でほとんどかかわっていない生徒もいる。

表IV-1 生徒からみた学習支援員

n = 87

1. 学習支援員とのかかわりの満足度は	平均点 71.8 (100点法)						
2. 学習支援員に親しみが持てるか。							
大いにもてる	33.3%	少し	44.8%	あまり	12.6%	もてない	8.0%
3. 授業や補習のとき、学習支援員に質問したり話しかけたりするか。							
よくする	20.7%	ときどき	27.6%	あまりしない	26.4%	しない	21.8%
4. 学習支援員は、ていねいに教えてくれていると感じるか。							
とても感じる	49.4%	まあまあ	36.8%	あまり	6.9%	全く感じない	3.4%
5. 休み時間に学習支援員と話すことがあるか。							
よく話す	11.5%	ときどき	32.2%	あまり	25.3%	話さない	31.0%
6. 学習支援員とのかかわりで、学校生活をがんばってみようという気になったか。							
とてもなった	18.4%	少しなった	34.5%	どちらとも	29.9%	あまり	6.9%
7. 記述内容から			ならなかった	8.0%			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・わかりやすく教えてくれる。</li> <li>・心なしか授業がスムーズに進むようだった。</li> <li>・話しやすい。</li> <li>・年齢が近いので話しやすい。</li> <li>・話にのってくれる。</li> <li>・楽しい。</li> <li>・親しく接してくれる。</li> <li>・やさしく接してくれる。</li> <li>・フレンドリー。</li> <li>・おもしろい。</li> <li>・話さない。</li> <li>・かかわっていない。</li> <li>・自分から話に行く機会がない。</li> <li>【ごく少数】</li> <li>・教え方がわかりにくい。</li> <li>・内容がわかりにくい。</li> </ul>							

#### (2) 学習支援員の評価

表IV-2は、学習支援員として活動したことに対するアンケートの結果である。学習支援員としての活動に対する満足度の平均点は70.0(100点法)であった。その理由を記述する欄には、学習指導員としてさまざまな経験をしたことに満足しながらも、もっと生徒のためにやれることがあったのではないかとという自省を込めたものもあった。それが、積極的に活動できたかとの問いに“まあまあ”という回答つながったのではないかと考える。全体としては、おおむね学習指導員としての活動を肯定的にとらえている者が多かった。また、教育や人(ひと)・生き方などについて考える機会になったかとの問いに、全ての学習指導員が程度の差はあれ“なった”と回答している。学習支援員にとっても、生徒とのかかわりは、学習の支援を通して生徒の学習のつまづきに気づき、わかりやすく教えようとすることで、教育について考

える機会になるだけでなく、授業時だけでなく休み時間での生徒とのかかわりも含めて、これまで接触がなかったであろうさまざまな生き方があり、生活や社会の課題に気づくきっかけになっていることがわかる。さらに自らの高校生活と本校での生徒の生活を比べて、改めて“学校”や“教育”について考える機会ともなっている。

表Ⅳ－２ 学習支援員へのアンケート

n = 9

1. 学習支援員としての活動の満足度は 

平均点	70.0
-----	------

 (100点法)

2. 学習支援員として積極的に活動できたか。

よくできた	0人	まあまあ	7人	あまり	2人	できなかった	0人
-------	----	------	----	-----	----	--------	----

3. 教育や人（ひと）、生き方などについて考える機会になったか。

とてもなった	7人	まあまあ	2人	あまり	0人	ならなかった	0人
--------	----	------	----	-----	----	--------	----

4. 記述内容から

- ・子ども達の状況を知ることやどこにつまづくかを知ることができる貴重な体験となった。
- ・これまで接したことのないような人たちとかがかわることができた。
- ・最初は不安だった、生徒が「先生、先生」と寄ってきてくれて、すごいやりがいを感じた。
- ・継続的に関わることで、授業に消極的であった生徒が徐々に学習に取り組んでくれるようになった。
- ・一年を通じて関わることで、生徒が心を開いてくれるようになった。
- ・一人ひとり個性が豊かだけど、みんな正直で優しい子ども達だと感じた。
- ・寝ている生徒や、やる気ない生徒にどう接したらいいのかとまどった。
- ・僕にとって簡単な内容だが、それにつまづいてしまう生徒にうまく説明ができなかった。
- ・活動を通して、大学や勉強だけが正解じゃないし、正解の人生なんかないと学んだ。
- ・教育では、生徒を取り巻く環境が大切だと感じた。
- ・一人ひとりの苦手な分野を指導する時間があれば良いと思う。
- ・生徒への接し方など、個々の事例について話し合う機会を設けていただければと思った。
- ・学習支援員同士の意見交換の場があれば、不安解消や支援改善につながるのではと思う。

#### 4. 学習支援員制度の成果と課題

##### (1) 成果

学習支援員が授業のサポートに入ることで、さまざまな課題を抱える生徒への個別的な支援がよりできるようになった。

学習支援員は、教員とは異なり生徒にとってお兄さん・お姉さんのような存在いわばくナナメの関係で親しみを持って肯定的に受け入れている。そのため、生徒は学習面で“わかりやすく教えてくれる”という成果だけでなく、社会的な面でも“親しく接してくれる”と人とのかかわりを学ぶ場にもなっている。

また、学習支援員自身にとっても、生徒への学習支援やおしゃべりを通して、教育や学校・社会について、これからの生き方について考える機会となっている。

##### (2) 課題

学習支援員に対して、受け入れる側の本校としての研修と、活動中のスーパーバイズを充実させる必要があると考える。

学習支援員と本校の若手職員を対象に「ピア・サポート研修」と名づけて1日研修を実施し

た。参加者の研修に対する評価は高かったが、学習支援員の参加者が少なかった。その後も、学習支援員を対象にした研修会を計画したが、大学院生や学生の参加可能な日時が折り合わず実施できなかった。学習支援員を対象とした研修は、本校の教育について理解を求め、生徒とのかかわりを学び、また学習支援員がより安全に安心して活動できるようにするために必要だと考えるが、学習支援員の参加可能な日時を設定するのが困難な状況にある。

また、ごく少数だが「こんなこともわからないのか、という態度でイヤだった」との声を聞くこともある。おそらく学習支援員は単に生徒の学力の低さに意外だっただけで否定的な気持ちはなかったのだろうと推察するが、学習支援員の言動を生徒が否定的に感じてしまったことも事実である。教員に対しても同じような声が向けられることはあり、数から言えば“学習支援員としての課題”ではないが、できる限り、そのようなような声が出ないように取り組んでいく必要がある。そのためには、学習支援員もアンケートのなかで求めていたが、生徒への接し方や個々の事例について話し合う場や意見交換の場、そして適切なスーパーバイズが適宜できるような方法を検討する必要がある。

## 第1節② 大学との連携 ～ ピア・サポート活動

### 1. 活動の目的

本校では、平成16年度より、高知大学の学生が古口高志准教授（臨床心理士）の指導の下、ピア・サポート活動として生徒の相談相手や遊び相手に入ってくれるプログラムを実施している。

本校には、支援を要する生徒が多く在籍していて、その中には集団の輪の中に入れない生徒もいる。また、現時点では同世代の生徒との活動に不安を感じていて「できれば安心して集団活動ができるようになりたい」という思いを持っている生徒も多い。そこで、そのような課題を抱える生徒が、少人数の中で、教員でも職員でもない少し年上の先輩である大学生と関わる中で、生徒同士が互いに思いやり、助け合い、支えあう人間関係を育むことができるような取り組みを「ピア・サポート活動」として実施している。また、このピア・サポート活動を通して、思いやりにあふれた学校風土の醸成につなげていくことを目指している。

ここでは、平成28年度の実践内容を基に、その成果と課題を明らかにする。平成28年度は、年間8回の活動を行った。ピア・サポーターとして高知大学の学生4名が各回2名ずつの輪番制で参加しサポート活動を行った。サポートを受ける生徒は本校定時制通信制生徒合わせて4名であった。したがって、各回はピア・サポーターと生徒を合わせて6名の活動が基本となった。また、生徒4名のうちの1名は、ピア・ヘルパーとして他の3名の活動を補助する形での参加であった。

### 2. 活動の日時と場所

活動は基本的には月に2回（隔週）、水曜日の午後1時から3時迄の2時間で実施した。活動場所は活動内容によっても変わるが、教室、近所の公園、調理室、体育館で行った。

### 3. ピア・サポーター

高知大学の古口高志准教授（臨床心理士）のゼミに所属する学生、またはピア・サポート活動に興味のある学生を募り、活動するために必要なことについて事前指導を受けた者をピア・サポーターとしている。そのピア・サポーターが交代で本校を訪れピア・サポート活動を行っている。毎回、活動の終了後、本校のピア・サポート活動の担当教員とピア・サポーターの学生でふりかえりの会を設け、本校生徒の様子や次回の活動計画を含めて情報共有する場をもっている。さらに、ピア・サポーターの学生は大学に戻り古口准教授のスーパーバイズを受けている。

### 3. ピア・サポート活動に参加する生徒

ピア・サポート活動に参加しサポートを受ける生徒は、主に個別支援ホームの生徒を対象としている。個別支援ホームに在籍している生徒の中で参加を希望する生徒に声をかけ、また、定時制通信制の担任、教育相談係、もしくはピア・サポート活動担当の教員が活動に参加する



のが妥当ではないかと思われる生徒に声をかけたメンバーで構成した。また、生徒の中からもヘルパー（助ける側）として活動できる人物に協力を求め、生徒のグループがヘルパー（助けられる側）だけにならないようにした。

#### 4. ピア・サポート活動の実際

平成28年度は、年間8回の活動を行った。ピア・サポーターとして高知大学の学生4名が各回2名ずつの輪番制で参加しサポート活動を行った。継続してサポートを受ける生徒は、本校定時制通信制の生徒を合わせて4名であった。したがって、各回はピア・サポーターと生徒を合わせて6名の活動が基本となった。また、生徒4名のうちの一人はピア・ヘルパーとして他の3人の活動を補助する形での参加であった。したがって、支援の対象となる生徒（ピア・ヘルパー）は3名であり、その他に不定期で参加した生徒が数名いた。

##### (1) ピア・サポート活動に参加した生徒

生徒A：小学校のころから不登校だったため、大人数の中で話せないという主訴があった。

昨年度も参加し、今年度は2年目の参加。

生徒B：集団の中に怖くて入れない、人とコミュニケーションをとることができない、という主訴があった。人の目を見て話せない、他の生徒の話聞いていない、突然変わった行動をすることがある、声が小さい、などの特徴が見られる。

生徒C：入学してから友人がおらず、クラスにも馴染めていない様子で一人の姿をよく見かけた。担任の声かけにより参加することになった。

生徒PH：ピア・ヘルパーとして活動に参加。ボランティア活動や学校行事に積極的に参加し、学校生活の中で生徒達のリーダー的存在のひとりである。

##### (2) 活動内容

表IV-3は、ピア・サポート活動に参加した生徒のようすを記録したものである。最初は表情や動きが硬かったり、ゲームのルールを守れないなどの行動が見られるが、回を重ねるにつれて次第に活動や会話がスムーズにできるようになっていることがわかる。

1年間を通して、全体的にみんな積極的に活動を楽しんでいたように見えた。また、生徒は最初の頃はピア・サポーターである学生との会話を中心に活動していたが、徐々に生徒間のコミュニケーションが増え、生徒同士でゲームのやり方を教えあったり会話を続けたりすることが多く見られるようになった。実際、活動に参加した生徒のうちの2人は活動の時以外でも一緒に過ごすようになり、友達としての関係を築けた。また、2年続けて活動に参加した生徒は、通信制から定時制へ転籍をし勉強だけでなく部活動にも参加するようになった。写真IV-1は、体育館での活動のようすである。

図IV-4は、ピア・サポーターが活動の後に記録する用紙である。この用紙に記録された内容を踏まえながら、本校の担当職員とのふりかえりを行っている。また、図IV-5は、ピア・サポート活動に参加した生徒が、活動の後に記入する振り返り用紙である。



写真IV-1 ピア・サポート活動の様子



表Ⅳ－３ ピア・サポート活動に参加した生徒のようす

生徒A	生徒B	生徒C	生徒PH
〈第1回目、2016, 7, 13〉コミュニケーションゲーム、テーブルゲーム、カードゲーム			
久々の活動ということもあり始めは表情が固かったが、後半は笑顔も出てきた。あいさつや自己紹介もでき、他の生徒の前でも自分の経験や考えを話すことができた。	声が小さく早口で、聞き取りにくかった。他の生徒とのコミュニケーションをあまりとっていなかった。ゲームのルールを一部破ってしまうところがあった。	大人数の中での活動であったが、必要な場面で発言することができ、また話し方も落ち着いていた。後向きな発言がめだった。	率先してゲームの準備、片付け、ルール説明などを行っていた。
〈第2回、2016, 10, 12〉w i l l、ビー玉落とし、カードゲーム			
ゲーム中に笑うことが多く、サポーターのリアクションに対して同調することが多かった。活動が始まるときに相手を見てあいさつをかわし、人見知りすることなく接していた。	少し落ち着きがなかった。ゲームに参加していない人を気遣うような言動が見られた。	教員とは話せるが、サポーターや他の生徒との会話は少なかった。だが、話しかけられると答える場面も見られた。	ゲームの準備をしたり、ゲームのやり方がわからない人をフォローしたりして、みなに気配りができていた。
〈第3回、2016, 11, 9〉w i l l、カードゲーム			
自分から話題を出して積極的に活動することができた。やわらかい表情で相手の目を見て話していた。	周りの話題に沿った発言をし、話し方もゆっくりで分かりやすかった。時に、自分勝手な行動も見られた。	表情が柔らかく自分から発言しながらも、自分の意見にこだわることなく周りとの活動を優先させていた。	ゲームの説明や進行をし、皆を盛り上げようとしていた。明るく活動に参加をしていた。
〈第4回、2016, 12, 7〉ドッジボール、だるまさんがころんだ、かくれんぼ、w i l l			
自らサポーターに話しかけることが多かった。久しぶりに会うメンバーに対しても臆することなく楽しそうに接していた。	外での活動がしたいと言っていたこともあり、積極的に参加していた。また、サポーターや他の生徒に話しかける場面も見られた。	外での活動の際に、終始疲れている感じで、動きが緩慢であった。ゲームをしているときの方が楽しそうにしている。相手の目を見て話すのが苦手なようす。	活動の際に、準備の手伝いをし、活動にも楽しそうに参加していた。
〈第5回、2017, 1, 18〉野球、キックベース、コミュニケーションゲーム、テーブルゲーム			
自分から話しかけることが多かった。スポーツのルールが分からないようだったが、自分なりに積極的に参加していた。活動の中で目を合わせるが多かった。	活動に積極的に参加していた。他の生徒にも話しかけたり、話を振ったりしていた。今回は自分勝手な行動をすることがなかった。	楽しそうに身体を動かしていた。積極的に動き、張り切っている姿が見られた。	外での活動はあまり乗り気でないような表情や行動が見られ、いつもの良さが活かせていないように見えた。
〈第6回、2017, 1, 25〉バドミントン、バレー、卓球、バスケット、カードゲーム			
楽しそうに活動していた。他の生徒とコミュニケーションをとり、共に活動する姿が見られた。	「球技が苦手だから、友だちとではなくサポーターとやりたい」と話す。カードゲームでは積極的にコミュニケーションをとっていた。	活動の中で、周りの人を笑わせようとしたり声かけをしたりする姿が見られた。	スポーツはあまり好きではないような言動が見られる。ゲームの司会ではいつも通り活躍した。
〈第7回、2017, 2, 15〉お菓子作り（クッキー、ホットケーキ）			
持ち前の器用さを活かして楽しそうに活動していた。周りの人に気兼ねなく話しかける姿が見られた。	サポーターに受験や学費に関する質問を多くしていた。場面に合わない話題や発言が時々ある。	他の人の作業を手伝ったり、洗い物を進んでやったりしていた。料理が好きで自分から周りの人に話しかけていた。少しずつ他のメンバーにも慣れてきたようす。	積極的に参加をし、周りの雰囲気気に気を配る様子が見られた。
〈第8回、2017, 3, 1〉カードゲーム、コミュニケーションゲーム、怖い話			
周りの質問に対してすらすらと答えていた。他の人の言動に興味を示したり、リアクションとったりすることができていた。まだ、積極的に話しかける場面が少ない。	怖い話（幽霊、祈祷師のことなど）をすごく話すが、早口になってしまう傾向にあった。興味のあることには集中力がある。	欠席。	欠席。


ピアカウンセリング活動記録

活動日： 年 月 日 ( 回目 )  
 担当者： \_\_\_\_\_  
 クライアント氏名： \_\_\_\_\_ male / female  
 学年： \_\_\_\_\_  
 生年月日 (年齢)： 昭・平 年 月 日生 ( 歳 )  
 問題・主訴：  
 \_\_\_\_\_  
 問題に関する基礎情報 (家族関係、友人関係、これまでの経緯、性格等)：  
 \_\_\_\_\_  
 活動記録：  
 ※Focus / Subjective-data, Objective-data, Intervention-Response, Assessment, Planに分けて書く  
 \_\_\_\_\_

図IV-4 ピア・サポーターの記録用紙

ピアサポート実践報告書 太平洋学園高等学校


日付： 月 日 ( ) 時間： ~  
 サポーター： \_\_\_\_\_ 生徒名： \_\_\_\_\_



今日の目標設定  
 \_\_\_\_\_

振り返ってみて  
 \_\_\_\_\_

次回目標設定  
 \_\_\_\_\_



図IV-5 生徒の振り返り用紙

### (3) 活動の結果

表IV-4は、活動に参加した生徒がピア・サポーター（学生）をどのように受け取ったかを問うたものである。全体として、生徒のピア・サポーターのかかわり方への満足度は高く、ピア・サポーターが自分たちの気持ちや考えをわかろうとしていた、合わせようとしていたことを感じ取っていることがわかる。ピア・サポーターとのかかわりが、勉強や進路、人間関係のことなどで学校生活への意欲の向上につながっているし、意欲を減退させる要因には全くなっていないこともわかる。このことは、「ピア・サポート活動」が安全・安心な活動のひとつであることを伺わせる。

表IV-4 参加生徒からみたピア・サポーター

n = 4

1. ピア・サポーター（大学生）とのかかわりの満足度は	平均点	75.0	(100点法)					
2. ピア・サポーターはあなたの気持ちや考えをわかろうとしていたか。	とても感じる	3人	まあまあ	1人	あまり	0人	全く感じない	0人
3. ピア・サポーターはあなたの気持ちや体調にあわせてかかわってくれたと感じたか。	とても感じる	2人	まあまあ	1人	あまり	0人	全く感じない	1人
4. ピア・サポーターとのかかわりで、学校生活をがんばってみようという気になったか。	とても思う	1人	まあまあ	1人	どちらとも	2人	あまり	0人
5. 記述内容から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しかった。</li> <li>・普通に楽しかった。</li> <li>・普通だと思う。</li> <li>・他人の考えがわかったらサトリになれています。</li> </ul>							

表IV-5は、ピア・サポーターに実施したアンケートの結果である。活動に対する満足度は100点法で65.0点であった。これは、“生徒が楽しいと思えるような活動ができていた

だろうか” “自分のコミュニケーションの力不足を感じた” などの自省を含んでのものであり「ピア・サポート活動」としては肯定的に評価して良いと考える。それぞれのピア・サポーターが、全体としては積極的に活動し、それを楽しめている。また、さまざまなタイプの生徒に出会い、サポートしたり、サポートしているようでサポートされたりしていることに気づくことなどを通して、ピア・サポーター自身が教育や人（ひと）、生き方などについて考える機会になったと回答している。「ピア・サポート活動」の目的のひとつである“他者を支援するだけでなくピア・サポーター自身の成長も促す” ことにもつながっていることがわかる。

表Ⅳ－５ ピア・サポーターへのアンケート

n = 4

1. ピア・サポーターとしての活動の満足度は	平均点		65.0		(100点法)		
2. ピア・サポーターとして積極的に活動できたか。							
よくできた	1人	できた	3人	あまり	0人	できなかった	0人
3. ピア・サポーターの活動を楽しめたか。							
とても	3人	まあまあ	1人	あまり	0人	楽しなかった	0人
4. 教育や人（ひと）、生き方などについて考える機会になったか。							
とてもなった	4人	まあまあ	0人	あまり	0人	ならなかった	0人
5. 記述内容から							
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒達が楽しいと思えるような活動ができていたかなと少し不安。</li> <li>・自分自身のコミュニケーション力など力不足を感じた。</li> <li>・生徒が抱えているものを、どのように察し対応すればよいのか難しいと思った。</li> <li>・できる生徒とできない生徒に分かれたときのフォローにとまどった。</li> <li>・生徒に“サポートされている”と感じることの方が多かった。</li> <li>・生徒とかかわる機会をもう少し増やしたかった。</li> <li>・生徒同士が、互いに思いやっている言動や行動が多々見られた。</li> <li>・相手を思いやることができる優しい子達だと思った。      ・生徒の成長が垣間見えて楽しかった。</li> <li>・自分自身が日常生活のなかでコミュニケーションのとり方に気をつけるようになった。</li> <li>・その日に活動内容を決めることが多く、事前に準備し活動の問題点を考えることができなかった。</li> <li>・活動の終わりに、次回の日時と内容を伝えることができるようなればいいと思った。</li> <li>・高校との連携が不十分で、生徒の要望に応えられないことがあった。</li> </ul>							

## 5. 成果と課題

- (1) 「ピア・サポート活動」が、サポートされる生徒にとっても、サポートする学生にとっても成長の機会となり、安全で安心な教育活動となっている。
- (2) より安全性に配慮しながら効果的なサポート活動とするために、ピア・サポーターに対するトレーニングやスーパーバイズを大学に任せるだけでなく、本校としても生徒の現実に応じたトレーニングやスーパーバイズができる体制を作りたい。
- (3) 今後は、活動内容の準備やその進め方について計画的に具体化していくこと、また、学生と足並みをそろえながら少人数だからこそできることについて考えたい。

## 第2節 地域との連携 ～ ボランティア活動（DAC）

### 1. DACとは

本校には、生徒のボランティアサークル（Dynamic Activities Circle、以下DAC）があり、表IV-6のように年間を通してさまざまなボランティア活動を行っている。

本校の生徒は、不登校経験があったり何らかの特性を有したりして、どちらかという支援助を受ける対象となり支援助する立場になる経験は乏しい者が多い。このような生徒が、DACの活動を通して、地域に貢献し他者を支援助する経験、地域のさまざまな年齢層の人達やさまざまな職種の人々と交流する経験を積み重ねることによって、社会性を育み自己肯定感を高めていくことを目指している。

表IV-6 DACによる年間の主なボランティア活動

A：作業が主で、人とのかわりが多い

B：イベントのスタッフなど、活動に伴うコミュニケーションが必要

C：他者へのサポートなど、主体的なコミュニケーションが必要

	校 内	校 外
4月	・入学式での交流〔B〕	・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕
5月	・PTA親子研修会〔B〕 ・コンサートでの交流〔B〕	・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕 ・自転車防犯キャンペーン〔B〕
6月		・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕 ・こうちこどもファンド公開審査会〔B〕 ・該当募金活動〔B〕足長育英会活動協力 防災訓練（校外への避難）〔A〕
7月		・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕 ・防災祭：ボランティアスタッフ〔B〕 ・私学フェアでの交流〔B〕
8月		・よさこい〔B〕 ・風土祭：ボランティアスタッフ〔B〕
9月		
10月	・体験入学のサポート〔B〕	・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕 ・地域の運動会に参加〔B〕 ・街頭募金活動〔B〕足長育英会活動協力
11月		・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕 ・医療生協健康まつり協力〔B〕
12月	・学園祭（前夜祭・本祭）での交流〔B〕	・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕 ・寸劇による交流〔C〕 ・保健祭：ボランティアスタッフ ・ボランティア研修会〔C〕
1月	・防災訓練（起震車）での交流〔B〕	・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕 ・寸劇による交流〔C〕
2月	・体験発表会での交流〔B〕 ・卒業式での交流〔B〕	・毎週水曜日に公園の美化活動〔A〕 ・保健祭ボランティアスタッフ〔B〕
3月		
その他	ボランティア研修会（12月） NPOや病院の祭りなどのイベントにスタッフとして参加	

DACには平成28年度が164名（全生徒の44.6%）、平成29年度が159名（全生徒の42.7%）と、多くの生徒が登録している。

DACの活動として、(A) 毎週水曜日に学校隣の公園での清掃活動や花壇の整備などの作業が主で人とのかかわりが多くないもの、(B) よさこい祭りなどのイベントのスタッフなど活動に伴うコミュニケーションが必要なもの、(C) 中学生体験入学の参加者へのサポートや小学校を訪問しての寸劇披露など主体的なコミュニケーションが必要なものなどを行っている。

## 2. DACの活動の実際

### (1) 公園の清掃と美化活動 ～ 作業が主で人とのかかわりが多くないもの

本校に隣接して公園があり、近隣の方々の憩いの場としてだけでなく、本校の生徒も昼休みや放課後には校庭代わりに昼食をとったり友だちとの語らいの場に使ったりしている。生徒も利用している公園でもあるので、授業日の毎週水曜日の昼休みを使って、公園の草取りや清掃、プランターでの花壇整備などを行っている。写真IV-2、写真IV-3は、そのようすであり、毎回10人程度の生徒が参加している。



写真IV-2 公園の美化活動（清掃）



写真IV-3 公園の美化活動（花壇づくり）

### (2) 「赤い羽根」街頭募金活動 ～ 活動に伴うコミュニケーションが必要なもの

外部団体からの要請に応じて、よさこい祭りなどのイベントのスタッフや街頭での募金活動や啓発活動のチラシ配布などの活動も積極的に行っている。これらの活動では、学外のさまざまな年齢層や職種の人々と一緒になって活動したり、街頭で自身の身をさらして見知らぬ人に声をかけたり募金をお願いするなど活動に伴うコミュニケーションが求められる。その活動のひとつとして「赤い羽根」街頭募金活動の結果を表IV-7に示している。最初は少々引っ込みがちであった生徒も時間が経つにつれてどんどん声を出せるようになっていった。生徒のなかにはできることをどんどん増やしたい、もっともっとという気持ちを随所に感じさせる者もいて、それが周りの生徒にもう少しがんばろうという意欲を喚起することにもつながった。



写真IV-4 街頭募金活動

生徒の振り返りでは活動後の満足度は100点法で87.1と生徒の募金活動をやったことへの満足度は高く、積極的に活動し楽しめていることがわかる。

表Ⅳ－7 「赤い羽根」街頭募金活動の結果(H28.12.10)

1. 「赤い羽根」街頭募金活動の満足度は 

平均点	87.1
-----	------

 (100点法) n = 7

2. 「赤い羽根」街頭募金で積極的に参加し活動できたか。

よくできた	6人	できた	1人	あまり	0人	できなかった	0人
-------	----	-----	----	-----	----	--------	----

3. あしなが街頭募金活動を楽しめたか。

とても	6人	まあまあ	1人	あまり	0人	楽しなかった	0人
-----	----	------	----	-----	----	--------	----

4. 積極的に声を出してあいさつやお願いをしたり、チラシを配ったりできたか。

とてもできた	5人	まあまあ	2人	あまり	0人	できなかった	0人
--------	----	------	----	-----	----	--------	----

5. 一緒に募金活動をした人たちと協力して活動することができたか。

とてもできた	7人	まあまあ	0人	あまり	0人	できなかった	0人
--------	----	------	----	-----	----	--------	----

6. 記述内容から

・楽しかった。	・意外と大変だったが、がんばった。	・人の温かさがわかった。
・募金してくれた人が多かった。	・みんなといるのが楽しい。	・また、やりたい。
・声出し、久しぶりでガラガラになった。	・満足はしているけど、うまく声を出せなかった。	

### (3) 区民運動会への参加 ～ 活動に伴うコミュニケーションが必要なもの

DACでは、本校が立地する地区の方とチームを組んで区民運動会に参加している。そこでは、種目によって地域住民の方が出場したり生徒が出たり、地位住民の方と生徒がペアを組んで出場したりして、それを互いに応援する姿が見られる。表Ⅳ－8は区民運動会に参加した生徒の感想であり、表Ⅳ－9は地域住民の方から見た生徒の姿である。

参加した生徒の満足度も高く、全体として運動会を楽しんでいるようすがうかがえる。ただ、数名の生徒がうまくなじめなかった生徒もいるが、それを地域の方も見ていて、気遣っていたことがわかる。また、地域の方も生徒を肯定的に受け入れ接していただいていることもわかる。

表Ⅳ－8 区民運動会に参加した生徒の結果(H28.10.16)

1. 区民運動会に参加した活動の満足度は 

平均点	90.0
-----	------

 (100点法) n = 11

2. 区民運動会に積極的に参加し活動できたか。

よくできた	7人	できた	4人	あまり	1人	できなかった	0人
-------	----	-----	----	-----	----	--------	----

3. 区民運動会での活動を楽しめたか。

とても	7人	まあまあ	4人	あまり	0人	楽しなかった	0人
-----	----	------	----	-----	----	--------	----

4. 地域住民の方々と楽しく交流し活動することができたか。

とてもできた	4人	まあまあ	7人	あまり	0人	できなかった	0人
--------	----	------	----	-----	----	--------	----

5. 仲間と協力して活動することができたか。

とてもできた	6人	まあまあ	5人	あまり	0人	できなかった	2人
--------	----	------	----	-----	----	--------	----

6. 記述内容から

・楽しかった。	・疲れたけど楽しかった。	・思っていたより本格的に楽しかった。
・友だちと楽しめた。	・休日を過ごす価値はあったと思う。	・来年も来たいと思った。
・(地域のひとと、同じチームと) 話すことができた。	・小さい子がかわいかった。	
・お年寄りのひとと話すことができた。		



表Ⅳ－９ 区民運動会で地域の方からみた生徒の姿 (H28.10.16)

1. 区民運動会での生徒の動きを点数にすると 

平均点	85.8
-----	------

 (100点法) n = 20

2. 生徒は運動会に積極的に参加し活動していたか。

よくできた	14人	できた	3人	あまり	0人	できなかった	0人
-------	-----	-----	----	-----	----	--------	----

3. 生徒は運動会を楽しんでいたと思うか。

とても	15人	まあまあ	3人	あまり	0人	楽しそうでなかった	0人
-----	-----	------	----	-----	----	-----------	----

4. 生徒は運動会で地域住民の方々と楽しく交流し活動していたか。

とてもできた	11人	まあまあ	6人	あまり	0人	できなかった	0人
--------	-----	------	----	-----	----	--------	----

5. 生徒の態度やマナーはどうだったか。

とても良かった	15人	まあまあ	2人	あまり	1人	良くなかった	0人
---------	-----	------	----	-----	----	--------	----

6. 記述内容から

・皆ががんばった。	・嬉しそうに参加していた。	・十分な活躍。	・笑顔。
・出場の時スムーズにできていた。	・二人三脚を組めば良かった。		
・まあまあよくできたと思う。	・普段あまり接することがなくいい機会だと思った。		
・ありがとう。	・地域の活動におおいに参加して欲しい。	・話しやすかった。	
・よく参加した方とできなかった方がいたように思う。	・あまり話す時間がなかった。		



写真Ⅳ－５ 区民運動会(1)



写真Ⅳ－６ 区民運動会(2)

#### (4) オープンスクール（中学生体験入学）でのサポート

##### ～ 他者へ能動的にかかわり主体的なコミュニケーションが必要

オープンスクール（中学生体験入学）ではDACのメンバーが、受け付け場所から説明会場までの案内や説明会場から体験授業の教室までの誘導、そして体験授業で共に学習したり学習のサポートをしたりしている。体験入学に参加している中学生のなかにも不登校校や別室登校の状態や対人関係に困っている状態などの課題を有している者がいる。そのような中学生に対して、DACのメンバーが親身にサポートしている姿が随所にみられる。これまで他者をサポートする機会や経験の少なかった生徒が、能動的に生き生きと中学生をサポートしている姿を見ると、他者をサポートすることによって自らの成長につなげていくであろうと実感させられる。もちろん、数名の生徒はうまく動けなかったと感じているが、そのような生徒もこれらの活動を重ねることによって徐々に社会性を身につけ成長していくことができると考えている。表Ⅳ－10は平成28年度のオープンスクールで中学生へのサポート活動を行った生徒のふりかえりの結果である。



表Ⅳ－10 オープンスクール（中学体験入学）でのサポート活動の結果（H28.10.11）

1. オープンスクールでの活動の満足度は 

平均点	77.4
-----	------

（100点法） n = 18

2. オープンスクールでの活動に積極的に参加し活動できたか。

よくできた	7人	できた	8人	あまり	1人	できなかった	0人
-------	----	-----	----	-----	----	--------	----

3. オープンスクールでの活動を楽しめたか。

とても	12人	まあまあ	6人	あまり	0人	楽しなかった	0人
-----	-----	------	----	-----	----	--------	----

4. 中学生や引率の方に緊張しないでスムーズに接することができたか。

とてもできた	7人	まあまあ	8人	あまり	3人	できなかった	0人
--------	----	------	----	-----	----	--------	----

5. 仲間と協力して活動することができたか。

とてもできた	7人	まあまあ	9人	あまり	0人	できなかった	2人
--------	----	------	----	-----	----	--------	----

6. 記述内容から

・楽しかった。	・がんばった。	・初対面で緊張したけど楽しかった。
・あいさつのしがいがあった。	・いろいろな人を見られたし手伝うことができた。	
・少し、一段と友情関係深めたかな…。	・これからも参加する。	
・中学生と一緒に何かが出来なかった。	・ことばがつまりかけた。	
・全く手助けできなかった。	・もうやりたくない	



写真Ⅳ－7 オープンスクール（受付）



写真Ⅳ－8 オープンスクール（開会式）

### 3. 地域の方の評価

表Ⅳ－6は、地区の公民館の役員をしていただいている方からのコメントである。本校では公園の美化や区民運動会への参加だけでなく、ほかにも一般公開の講演会やコンサート、学園祭やその前夜祭で地域の方への招待、パソコン教室の開催など多くの活動を地域に対して開いている。そのような本校の地域連携に対しての満足度は70点（100点法）であり、学校の教育活動が徐々に成果を挙げていることも評価していただいている。その一方で、事前の準備と共に活動に参加する生徒への事前指導の指導をよりいっそう細やかにしていねいに行うことの大切さを指摘され、さらに教育の成果をあげることの期待が述べられている。

表Ⅳ－11 地域の方からのご意見(H29.01.)

1. 本校の地域連携に対する満足度は 

平均点	70.0
-----	------

 (100点法)

2. 意見

- ・もっと具体的に、もっと日常的にあるべき。
- ・もっと精鋭を選びすぐり訓練(練習)を重ね、本番にのぞむことが肝要。
- ・以前は問題行動を起こす生徒がいたが、最近は聞かなくなった。
- ・企画、構成、キャスティング、テスト、リハーサル、成果、効果、etc…を再々チェックし、達成感の味えるような筋書きが必要だと思う。
- ・瞬間的でなく、思いつきでなく、継続的に、組織的に、意図的に、もっと現実的に成果をあげることを期待しています。

#### 4. 成果と課題

##### (1) 成果

DACの活動を通して、表情が明るくなり人とのかかわりが増えたり、積極的に活動するように生徒の姿が見られるようになったりして、その数も少しずつ増えている。廊下に立ちすくんでいる友だちに話しかけたり、登校すると自主的に玄関前のプランターに水やりをしたりする生徒の姿が見られるようになった。

また、DACの活動が学校のなかに徐々に定着してきているし、学校近隣の方々や学外のさまざまな機関や団体にも認められつつある。さらに活動が多くの人や地域に求められると同時に活動内容もより評価されるようにしていきたい。また、地域からの学校や生徒への評価も高まってきている。

##### (2) 課題

- ・DACへの登録者数は多いが、その数に比べて参加者が少なく固定的なメンバーになる傾向がある。より多くの生徒がDACの活動に参加するように広報や勧誘、実施方法などを工夫する。
- ・生徒達自らの発案によるボランティア活動にも取り組んでいく。
- ・生徒間で事前の打ち合わせや事後の反省会などが自主的に行われるようにする。
- ・事前指導の際に活動で求められるであろうコミュニケーションスキルについてトレーニングをしたり、活動中に生じる可能性のある課題はどんなことかを考えその対処法を具体的に検討しロールプレイしてみたりすることによって、活動をより生徒にとって意味あるものに効果的なものにしていきたい。
- ・他者を支援することによって生徒自身の肯定感や効力感を高めることができるような“他者に積極的にかかわりサポートする活動”を増やして取り組んでいきたい。

### 第3節 支援機関との連携

生徒の自立を支援するために、校内だけでなく学校外のさまざまな関係機関と連携して行った活動を報告する。

また、高校におけるSSWの業務のあり方についても検討していく。

#### 1. 生徒の高校入学前後での関係機関との連携

本校に入学してくる生徒のなかには、長期の不登校経験や被虐待の経験、発達障害、知的障害など、さまざまな課題や特性を有する生徒がいる。また、その二次的な障害としての、対人関係がうまくとれない、低学力、過度の甘えや反発、自信や意欲のなさ、がんばる・努力する経験の不足などの課題を抱える生徒もいる。そのような生徒の状況を入学時まで、あるいは入学後のできるだけ早い時期までに具体的に把握することは、生徒が高校生活にうまく適応していくのを支援するためには重要なことである。

また、関係機関へ本校との連携についてアンケートを行ったところ、表Ⅳ-12のように連携の満足度は100点法で81.9点、情報交換や意思疎通ができています、連絡を取りやすいとの評価を得ることができた。一方で「生徒や保護者への支援を行うのに、どのような連携が大切か」との問いに、“入学前後で中学校生活に対する細やかな情報交換、情報共有、意思疎通”“担当者間でのスムーズな情報共有、引き継ぎに来校して欲しい”“中学校にこまめに気楽に連絡をして欲しい”などの記述があった。

表Ⅳ-12 関係機関へのアンケート(1)

n = 35

1. 本校との連携の満足度は 

平均点	81.9
-----	------

 (100点法)

2. 連携、情報交換や意思疎通はうまくいっていると思うか。

とても思う	57.1%	まあまあ思う	37.1%	あまり思わない	5.7%	全く思わない	0.0%
-------	-------	--------	-------	---------	------	--------	------

3. 本校は連絡をとりやすい、オープンと思うか。

とても思う	62.9%	まあまあ思う	37.1%	あまり思わない	0.0%	全く思わない	0.0%
-------	-------	--------	-------	---------	------	--------	------

これまで、気がかりな生徒が在籍していた中学校や教育センター、適応指導教室などを訪問して情報を得ていたが、入学する生徒が在籍していた全ての中学校を訪れてはいなかった。

そこで、平成29年度は、入学する生徒が在籍していた全ての中学校を訪問した。入試の合格発表から入学式までの期間に、特別支援教育コーディネーター（以下、特別支援教育C）とSSWが主となって教育相談係の職員で全ての入学予定生徒が在籍していた中学校、そして利用していた教育センターや適応指導教室などを訪問して、中学時の生徒のようすを聞き取り、かわり方や配慮すべき事項などについて確認していった。訪問に際しては、誰が中学校を訪問しても基本となる情報の聞き漏れがないように「生徒状況 聞き取りシート」（図Ⅳ-6）を作成し活用した。

次に、聞き取った内容を図Ⅳ-7のシートを使って整理しクラス毎に一覧を作成した。この資料を基に、校内の支援会で5月に定時制生徒、6月に通信制生徒の情報を全職員で確認した。



## 2. 生徒が高校生活を継続するための関係機関との連携

高校生活のなかで、保護者の心身の不調や離婚、失業などによる家庭環境の変化や、生徒自身の心身の不調、友人関係とのトラブルなどから、登校や学習に困難を生じる生徒もいる。本校は、単位制であり定通履修や通定履修もできるので、生徒の状態に合わせた柔軟な学習が可能であり、また心身の不調により教室での授業や一斉での活動が困難なときは個別対応で支援できる体制もとっている。

しかし、このような校内の支援だけでは十分に  
対応できなくて、福祉や医療等の関係機関との連携を図らないと効果的な支援が困難なケースもある。また、生徒の兄弟姉妹

表Ⅳ－１３ 関係機関との連携の実績

〔SSW、特別支援コーディネーター対応分〕

内 容	H27年度	H28年度	H29年度
関係機関との電話での情報収集や情報共有		157	112
生徒や保護者が関係機関を訪問する際に同行	4	19	10
関係機関を訪問して情報収集	5	17	21
関係機関が来校して情報収集	5	11	14
関係機関を訪問して支援会〔ケース会議〕		13	13
関係機関が来校して支援会〔ケース会議〕	10	17	12
本校が主催して複数の機関による支援会		3	2

※ 平成26年度からSSWを配置

(H29年度は12月末迄の集計)

が課題を抱えているとか、家庭そのものが危機的な状況だとして、関係機関から連携の要請を受けることもある。表Ⅳ－１３は、本校のSSWと特別支援教育C○が関係機関と対応した分の実績であるが、年々増加傾向にあることがわかる。本校は平成26年度からSSWを週40時間のフルタイム勤務で配置している。関係機関へのアンケートでは、74.3%が本校にSSWが常勤していることを知っており、SSWの配置が関係機関にも徐々に周知されつつあることが連携の増加の一因になっていると思われる。

関係機関との連携のひとつとして次のような事例がある。生徒Yは中学校時に不登校経験があり未だ精神的に不安定さを感じさせ、しかも母親は特性を有している。家を引っ越すことになり、支援を継続させるため新旧の所在地の保健師、サポートステーションの職員を交えて本校で支援会を持ち、生徒への支援や母親への支援をどこが、どのように行うかを具体的に確認した。その後も関係機関と状況を伝え合いながら生徒や保護者への支援を行っている。

表Ⅳ－14 関係機関へのアンケート(2)

n = 35

4. 情報の提供や相談、問い合わせに対する対応などは適切になされていると思うか。

とても思う	65.7%	まあまあ思う	34.3%	あまり思わない	0.0%	全く思わない	0.0%
-------	-------	--------	-------	---------	------	--------	------

5. 個別支援のための「支援会」は適切になされていると思うか。

とても思う	40.0%	まあまあ思う	31.4%	あまり思わない	11.4%	全く思わない	2.9%
-------	-------	--------	-------	---------	-------	--------	------

6. 「支援会」についての記述内容から

- ・ 支援会を知らない。参加したことがない。入学時の支援会以外は知らない。(中学校)
- ・ ケース会議への出席を依頼すると参加してくれる。
- ・ 支援会の目的と役割分担を明確にする。 ・ SCやSSWとの連携。
- ・ 専門性を有する人物の参加が必要。 ・ 日頃から顔の見える関係性をつくっておくことが重要。
- ・ 高度な専門的見地からの「見立て」に基づいた支援が必要。
- ・ 情報交換や支援機関の紹介だけでなく、具体的な支援ができるような連携が必要。・

表IV-14で示されるように、本校の関係機関に対する情報の提供や問い合わせに対する対応などについては高い評価であるが、支援会（ケース会議）については、否定的な回答や“知らない”という記述があった。また、支援会（ケース会議）について、“専門性を有する人物の参加”や“専門的見地からの「見立て」に基づいた支援”“情報交換や支援機関の紹介だけでなく具体的な支援ができるような連携”の重要性が指摘された。このことは、支援会（ケース会議）が、情報交換や目の前の事象への対処にとどまり、そのケースの『真のテーマは何か（ケースのもっている意味は何か）』『将来の改善につながる現在の支援とは何か』などの視点で具体的な支援策を検討したり、あるいは、ケースのさまざまな展開の可能性を検討しその時の対応や連携のあり方をシミュレーションしたりするには至っていないこともあると考えられる。その理由として、先ずケースの意味を考える（見立てをする）ような経験豊富で力のある人材の不足や、そのための時間を確保することの困難さの課題があると思われる。

### 3. 生徒の卒業後の自立へつなぐための関係機関との連携

本校には、身体に障害を持つ生徒、発達障害や知的障害、またその疑いを感じさせる生徒、対人不安や脅迫傾向などの神経症を抱える生徒なども在籍している。これらの生徒を卒業後の自立へつなぐための支援を行うために関係機関との連携を行っている。その取り組みのひとつが職場体験学習であり、もうひとつは課題や特性を有する生徒を卒業後の支援につながるための関係機関との連携である。適切な支援や関係機関との連携を円滑にできるよう校内に『キャリア教育推進委員会』を設置した。その構成は、進路指導部担当職員、特別支援教育C o、SSW、教育相談C o、就職支援C o、スクールカウンセラー（以下、SC）、キャリアコンサルタント（以下、CC）である。毎月、キャリア教育推進委員会を開催し、取り組みの方向性を検討したり経過を確認したりしている。取り組みの実働は、就職支援C oの2名と特別支援教育C o、SSWが中心となって行っている。

#### (1) 職場体験学習

昨年度（平成28年度）か

**職場（職業）体験をしてみませんか！！**

将来は就職を希望しているけれど、働くにはちょっと自信がもてない  
アルバイトをしてみたいけど、知らない人と接することにも不安がある  
どんな職業があるのか、どんな仕事が自分に向いているのか分からない


「職場（職業）体験学習」にチャレンジして  
自分のステップ・アップを目指してみませんか！

\*実施時期：9月を予定

\*実施期間：3～5日程度

\*職場体験先：生徒や保護者と相談をして決めていきます。  
\*事業所等については、学校が現時点で了解している事業所一覧を、申し込みされた生徒にお知らせし、担当教員と一緒に検討していきます。もし一覧になければ、一緒に探します。

\*対象生徒：全2年次生（定・通）に要項を配布し、希望者が対象となります。  
ただし、1年次生、3年次生で、特に希望する生徒は、担任の先生と相談して申し込むことも出来ます。



□職場（職業）体験の参加には、必ず保護者の同意の上、事前申し込みが必要になります。

□申し込み締め切り：6月3日  
下記の申し込み表にご記入の上、ホーム担任か進路担当にお知らせください。

----- 切り取り線 -----

(2017年 月 □)

■職場体験学習の申し込みを希望します。

(定時制課程・通信制課程) ( )年次 ( )ホーム  
生徒氏名 ( )保護者氏名 ( )印

\*もし本人（保護者）で事前に希望する事業所名があれば記入しお知らせください。  
事業所名 ( )電話番号 ( )

◎希望する事業所は、生徒自身が自転車や公共交通機関で通える範囲で考えてます。現時点で、「自宅から学校までの通学方法を考えて、無理をしないで通える事業所を、あげていただければ、学校の担当者が事業所の方に、職場体験学習にご協力いただけるようお願いに伺います。

図IV-8 職場体験学習の希望者募集



ら、希望者を対象に職場体験学習を行っている。生徒や保護者には、「将来は就職を希望しているけど、働くには自信が持てない」「アルバイトをしてみたいけど、知らない人と接することに不安がある」「どんな職業があるのか、どんな仕事が自分に向いているのか分からない」などを感じていたら、職場体験学習をやってみませんかと呼びかけている。(図IV-8)

職場体験学習の取り組みの大まかな流れを表IV-15に示した。参加者は、昨年度も今年度もそれぞれ9名であった。職場体験の事業所は生徒と保護者から希望を出してもらい、その事業所を就職支援C○が訪問し体験学習の受け入れを依頼し了承を得て決定している。職場体験学習の実施事業所としてはスーパーマーケットやドラッグストア、農業法人などが多かった。職場体験学習の前には、あいさつや声出しなどのスキルトレーニング、職場体験学習時の留意事項や日誌の記入の仕方、連絡方法の確認などについての事前指導を2回行った。その後、体験学習を受け入れてくれた事業所を生徒が就職支援C○と共に訪問して開始前のあいさつを行った。また、職場体験学習の終了後は、参加者全員が集まってそれぞれの実習体験を報告しふりかえりを行い、事業所への礼状をしたためた。図IV-9は、職場体験学習の時に記録する『業務日誌』の一部である。

表IV-15 職場体験学習 実施の流れ

5月	参加希望者の募集開始
6月	希望生徒へのオリエンテーション 希望事業所への職場体験受け入れ要請
7月	事業所と打ち合わせ
8月	オリエンテーション(2回) SST、日誌の記入の仕方など
9月	事業所への事前あいさつ 職場体験学習(3日間程度) ふりかえり、礼状作成

### 職場体験学習 | 実習先研究シート

○ 職場体験の前に、これから体験する会社・事業所や仕事について、イメージや疑問点を書き出してみましょう。

○ 職場体験が終わったら、実際に体験した感想も書き出してみましょう。

事業所名 実習期間 月 日( ) ~ 月 日( )	
------------------------------	--

◇ 体験前に書きましょう

どんな仕事だと思いますか？  
おもしろそうなところ、たいへんそうなところを挙げてみましょう。

聞いている人に聞いてみたいこと、体験してみたいこと

私の職場体験目標

### 自己評価

<記入例>

月	日	曜日	起床時間	時	分	体調	□良い	□ふつう	□悪い	
生徒記入欄	本日の仕事内容 朝の体調について、□に <input checked="" type="checkbox"/> を入れてください。									
	本日の感想									
	明日の目標 当日どれくらい勤務したか計算してみましょう。 (※昼食時間はのぞく。)									
	出社～退社		:	~	:	実習時間	時間	分		
事業所記入欄	連絡事項		担当者名							印
	勤務終了後に事業所の方に提出して、記入をお願いしてください。									
	保護者より連絡欄									
	保護者の方から事業所に連絡がある場合は記入してもらってください。 特になければ無記入でかまいません									

【1日目】

月	日	曜日	起床時間	時	分	食欲	□ある	□ふつう	□ない	
生徒記入欄	本日の仕事内容									
	本日の感想									
	明日の目標									
	出社～退社		:	~	:	実習時間	時間	分		
事業所記入欄	連絡事項		担当者名							印
	保護者より連絡欄									

図IV-9 職場体験学習「業務日誌」の一部

表IV-16は、今年度(平成29年度)の職場体験学習に参加した生徒の感想を集約したものである。全体的には良い評価が得られたが、最終日まで続けることができなかつた生徒が一



人いてその生徒の評価が低かった。ただ、その生徒は、コミュニケーションに課題を感じて緊張感から動きづらくなったのだが、仕事はていねいで素早くでき店の担当者の評価も高かった。職場体験学習に参加した生徒の保護者のなかからは「就労移行支援事業のアセスメントを受けてみたい、そのための支援をして欲しい」との依頼も出てきた。職場体験学習で自信をつけた生徒もいるし、逆に自らの課題を改めて実感し落ち込んでいる生徒もいる。ただ、そのような生徒には、この職場体験学習の経験から自分の課題や特性を自覚し、自分なりの自立を具体的に模索できるような支援を継続して行っている。



写真Ⅳ－９ 職場体験学習のようす

表Ⅳ－１６ 職場体験学習の結果

1. 職場体験活動の満足度は	平均点	70.0	(100点法)	n = 9			
2. 職場体験学習で積極的に活動できたか。							
よくできた	57.1%	できた	37.1%	あまり	5.7%	できなかった	0.0%
3. 職場体験学習を楽しめたか。							
とても	62.9%	まあまあ	37.1%	あまり	0.0%	楽しくなかった	0.0%
4. 職場体験学習は、これからの生き方を考えるうえで役立つと思うか。							
とても思う	65.7%	まあまあ	34.3%	あまり	0.0%	思わない	0.0%
5. 記述内容から							
<ul style="list-style-type: none"> <li>・声が小さく意思表示がうまくできなかった。</li> <li>・突発的な会話に対応できなかった。</li> <li>・分からないときに自分から質問できた。</li> <li>・仕事のふだん知ることのできない面を知った。</li> <li>・いろいろな経験ができて良かった。</li> <li>・最初は不安も多かったけど、だんだん慣れてきて非常に真剣に取り組むことができた。</li> <li>・最終日まですることができなかった。</li> <li>・かなり疲れてしまった。</li> <li>・人と協力しながらできた。</li> <li>・いろいろなことを教えてもらった。</li> <li>・将来に役立てていきたい。</li> </ul>							

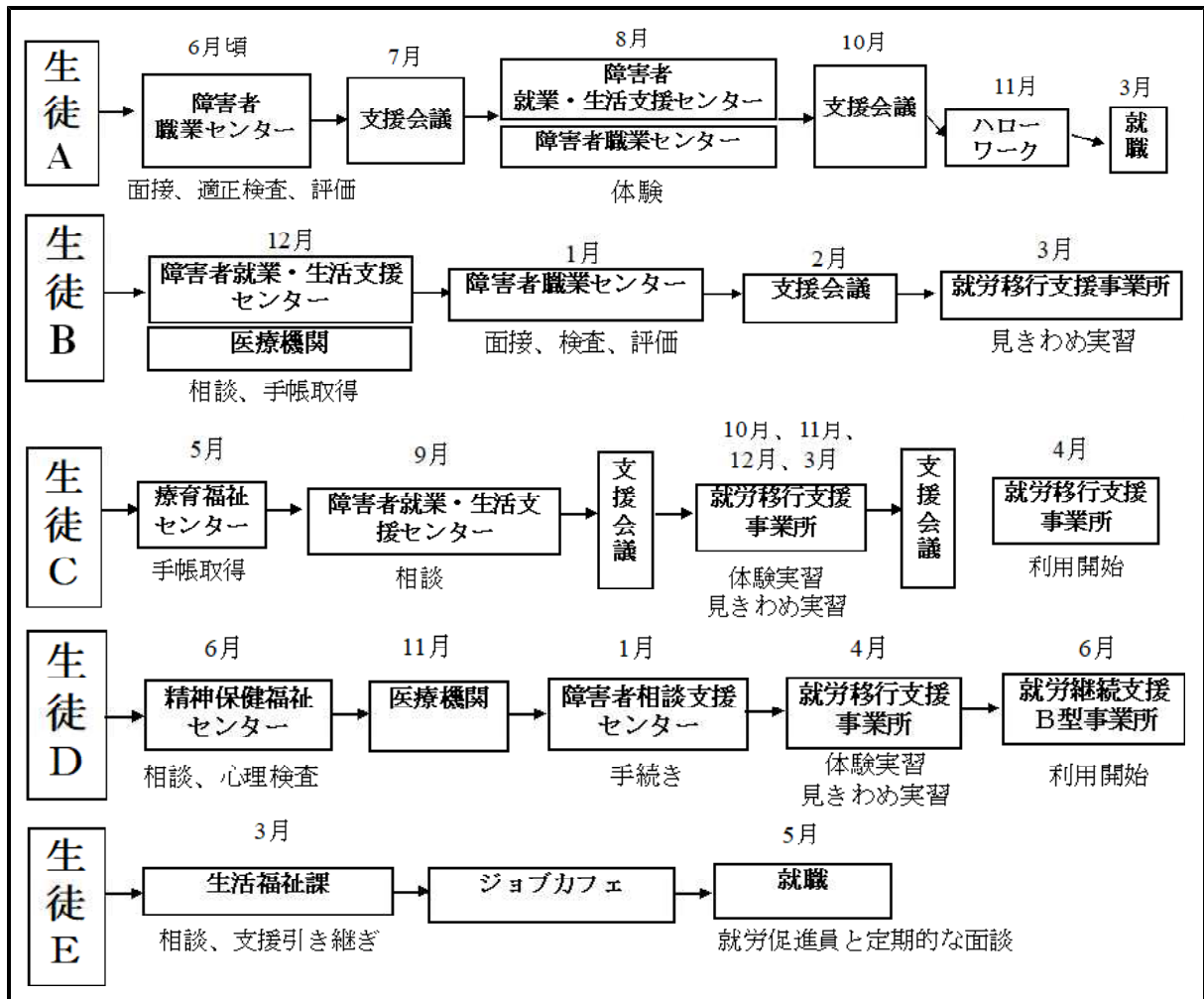
## (2) 生徒を卒業後の支援につなぐための関係機関との連携

課題や特性を有する生徒の中には、一般就労は困難なのではないかと思われる者もいる。生徒本人や保護者が、そのことをどのように受け止めているのかという課題も大きい。

課題や特性を有するために一般就労は困難なのではないかと思われる生徒には、担任や進路指導部と連携を図りながら、生徒自身や保護者の意向を確認しつつ、アセスメントや障害者就労支援を受けるための方法を伝えたり、一緒に市町村の障害担当課や精神保健福祉センター、障害者就業・生活支援センターに同行したりして支援を行っている。その経過はキャリア教育推進委員会でも確認し、その方向性が妥当かどうかも検討している。

図Ⅳ－１０は、その個別支援の事例の一部を示したものである。プライバシー保護の観点から支援の流れのみを記し、個別の生徒の特徴や面接の内容などは記していない。

生徒本人が自らの課題や特性をどの程度理解し受容しているか、また保護者の子どもの状態に対する理解や受容も大きな課題であり、さらに保護者自身も何らかの課題や特性、疾患などを抱えていることもあり、それらの状況によって実際の支援がスムーズにいたり、大きな困難に直面し立ち往生してしまったりすることがある。



図Ⅳ－１０ 個別支援の事例

そこで、生徒や保護者への支援がより効果的なものとなるように、すべての教職員を対象に、一般の進学指導や就職指導だけでなく、課題や特性を有する生徒の自立を支援するために福祉制度のしくみを理解し、

高校在学中にどんなことを指導できるのか、どのような関係機関があり、その活用についての考えるための教職員研修を今年度は9月にⅣ－表17のような内容で行った。何となく課題意識を持ちながらも、具体的な内容は知らなかった職員も多く、福祉制度を理解し活用した生徒への支援を考えるいい機会になったとの教職員の感想も得られた。

#### 4. 高等学校におけるSSWの活動についての考察

本校は週40時間（フルタイム）勤務で常駐するSSWを平成26年度から配置し、現在4年目である。本校での4年間のSSWの活動を踏まえながら、高等学校におけるSSWの活動のあり方について具体的に考えてみる。

表Ⅳ－１７ 職員研修（平成29年9月実施）

テーマ：特別な支援を要する生徒への進路指導  
 ～障害者就労支援についての理解を深める～  
 講師：K市障害福祉課  
 障害者就業・生活支援センター

表Ⅳ－１８と表Ⅳ－１９は、平成２９年７月にＫ県内のＳＳＷを対象に実施したアンケートの結果である。アンケートの結果として、次のようなことが特徴的であった。①ＳＳＷの勤務形態は派遣方式や巡回方式が多く、単独校方式は少ない。②効果的な支援を行うには現在の時間では足りないと感じているＳＳＷが多い。③ＳＳＷについての理解が学校だけでなく関係機関も含めて十分でないという指摘が多かった。④学校で管理職と教職員間の考え方の相違、まとまりのなさを感じてＳＳＷが動きにくくなっているケースもある。⑤学校の教員や関係機関の担当者との人間関係作りや信頼関係作りにも苦慮しているＳＳＷも多い。⑥心理的要因はともかく、現象としてＳＳＷがかかわっている事例では不登校が圧倒的に多い。その次に、派遣方式では子育てや学校と

表Ⅳ－１８ Ｋ県内のＳＳＷへのアンケート結果(1) n = 25

1. ＳＳＷとして関わった事例		2. ＳＳＷとして関わった支援のタイプ	
経済的困窮	32.0%	子どもへの支援	68.0%
医療への支援	48.0%	保護者への支援	60.0%
子育て	60.0%	個々の先生方への支援	52.0%
保護者間の課題	4.0%	校内支援会での支援	48.0%
学校と家庭の課題	36.0%	関係機関との連携	60.0%
子ども間の課題	32.0%	その他	0.0%
進路の課題	32.0%		
不登校(家庭訪問)	92.0%		
別室登校への支援	32.0%		
その他	4.0%		

3. ＳＳＷの勤務形態別の支援の特徴

拠点校方式では、不登校や別室登校の事例、子どもや保護者への支援が多かった。
派遣方式では、不登校と子育て・学校と家庭の課題の事例、保護者への支援・個々の先生方への支援が多かった。
巡回方式では、不登校と別室登校・子育ての事例、子どもへの支援・校内支援会での支援・関係機関との連携が多かった。
高校では、不登校と医療・進路の課題の事例、生徒への支援が多かった。

家庭の課題への支援、巡回方式や拠点校方式では別室登校の子どもへの支援が多い。⑦高校では病院との連携や進路指導についての支援があり、支援する事例の傾向がが少し異なる。⑧支援会がＳＣとの連携も含めてうまく機能していない、支援会で具体的な支援策や目標などを検討・決定、共有するという土壌が未だ育っていない面がある。⑨ＳＳＷの身分の不安定さを危惧する意見。

表Ⅳ－１９ Ｋ県内のＳＳＷへのアンケート結果(2) n = 25

3. ＳＣとの連携やケース分析はなされているか。

できている	24.0%	まあまあ	32.0%	あまり	16.0%	できていない	24.0%
-------	-------	------	-------	-----	-------	--------	-------

4. 学校や教職員との関係、関係機関との連携などで感じる課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ＳＳＷへの理解が学校だけでなく関係機関も含めて未だ不十分。</li> <li>・ 教員と協議する時間や面談時間の確保。      ・ 非常勤のため連絡や調整が適宜できない時がある。</li> <li>・ 学校や教員との関係づくり。      ・ 学校の閉鎖性。      ・ 教職員間のまとまり。</li> <li>・ 支援会の持ち方や内容の充実。      ・ 支援や改善の目標などの共有、情報の共有。</li> <li>・ 複数の関係機関がかかわるときの連携のあり方や、そこでのＳＳＷの立場。</li> <li>・ ＳＳＷの立場で、どこまで依頼し、どこまで話していいのか。</li> </ul>
--

本校のＳＳＷは週４０時間のフルタイムでの勤務（単独校）なので、派遣方式や巡回方式のＳＳＷと比較すると支援のための時間が足りないということはなく、むしろ時間的には最大限

に確保できている。ただ、フルタイムの勤務であるために他の教員と同様に校務分掌（本校では教育相談係）に組み込まれている。教育相談係という校務分掌に入ることによって、教務や生徒指導、進路指導などの学校のシステムが理解でき、学校行事で他の教員と同列の役割分担で動くことによって同僚としての仲間意識や信頼関係を形成することができ、連絡や連携がとりやすくなるというメリットがある。一方で、これがSSWとしての業務だと明確にすることができないという現実もある。しかし、元々スクールソーシャルワークは教育相談、特別支援教育、スクールカウンセリングなどの業務との境界が明確にできない、あいまいで互いに重なり合っているものであり、そのため何がSSW本来の業務なのかを明確にすることは難しく、無理な側面もある。学校に常駐することで教員と同じような意識を持つことができることがメリットとなるように意識しながら、SSWとしての専門性が活かせるような生徒・保護者支援や関係機関との連携などを積み重ねて経験知を増やしていくことが大切だと考える。

「児童生徒の教育相談の充実について（教育相談等に関する調査協力者会議、平成29年3月報告）」では、SSWやSCに相談活動を行うための特定の場所（教育相談室等）を確保すること、教職員との信頼関係の構築を図るため、コミュニケーションを図りやすくなるよう職員室にも席を設ける等の配慮が重要であることを指摘している。本校では、教育相談室は確保しているが、施設的な制約もありSCやCC、教育相談C○などが勤務しているときは教育相談室で待機しているため、SSWが自由に使える状況ではなく若干の制約がある。その為、本校では、現在SSWの机を事務室に置いている。事務室は玄関を入れて直ぐの1階にあり、職員室は2階にある。SSWが事務室にいて、外部からの問い合わせや連絡、連携がとりやすい、相談に来て玄関を入れて直に声をかけることができるなどの利点がある。事務室に机があることで、生徒・保護者の家庭的な状況や経済的な状況、校納金の納入状況などが速やかに確認でき、SSWとして対応しやすいメリットもある。また、時には電話対応の内容が生徒の出入りがあり、また生徒対応や授業の準備などさまざまな業務が行われている職員室ではためられるような話題もあり、職員室以外の場で電話を受けることができることが対応のしやすさにもつながっている。一方、事務室は1階、職員室は2階にあるため、SSWの電話対応や相談、支援会に参加するための出張などの動きが、教員には見えづらくなっているという側面もある。また、同じ部屋で机を向き合わせていると、“ついでの話”としての情報交換ができるが、フロアも部屋も異なるため“ついでの話”をする機会が少ないという現状がある。それでも、毎日、同じ勤務時間で同じ校舎内にいるために、次第にSSWの業務について教員の理解も深まりつつある。教職員との信頼関係を構築するために職員室にSSWの居場所を確保することは大切であろうが、一方でSSWとしての専門性を伴う業務を職員室で行うには困難があるということはSSWだけでなく教職員も理解し留意しておかなければならないだろう。

SSWが教員と同じ勤務形態で学校に常駐しているが、SSWは本来教員ではないため教務規定や生徒指導規定などとその運用や、生徒や保護者に対するとらえ方などの学校文化になじむのに時間を要するし、一方で、SSWの専門性や独自性を考慮するとなじんでしまうことの危うさも感じる。SSWだけでなくSCなど教員以外の人物が学校に入るとき、教職員間の共通理解やまとまりをどう図っていくかは、学校そのものが抱える永遠の大きなテーマのひとつだと考える。

K県内のSSWがかかわる事例として不登校が圧倒的に多い。本校でも不登校生徒への家庭訪問などを通して支援も行っているが、本校に入学し何とか登校しながら教室に入れにくい・人

と話せないという生徒や、神経症的な症状で動きづらくなった生徒達への校内での個別支援の事例も多い。別室での個別学習の支援、一緒に教室に入っでの学習、教室移動の際の同行など、また具体的な支援策を検討するための生徒や保護者、時には医者を変えての支援会の開催などの業務も行っている。

S S Wがかかわる事例として、幼稚園や小学校の子どもが対象となる時、ケースによっては子どもに直接会うことなく、学校と打ち合わせて保護者と面談し関係機関につなぐことで終結するようなこともあるだろう。しかし、高校では、生徒の発達段階を考慮すると、支援のプロセスのどこかで生徒本人の意向や気持ちを確認しようとする配慮、支援の内容を理解してもらおうとする願いを持っておくことは大切だと考える。また、高校で扱う事例は、卒業後の進路や自立につながるものが多く、その場合は、対象となる生徒に直接かかわることが求められ、生徒との信頼関係をつくり、生徒の意思を確認しながらの支援につなげていくことが大切であろう。その意味では、S S Wが学校に常駐していることは、生徒との面接の機会を持ちやすいだけでなく、生徒の日常の学校生活を見ることができるという利点にもなっている。

また、中学校までは子どもの特性を理解し受け入れ周りが配慮することが強く求められる。しかし、高校では、それだけでなく生徒自身が自分の特性を理解し受容すること、そこから課題を確認し対処法を身につけることも大きなテーマになると考える。高校卒業後の自立を考えると、社会がいつでもどこでも自分に対して配慮をしてくれるとは限らない、そのとき、自分がどう対処すべきか、どう配慮を求めるか、自分をどう開示するかなどを高校卒業までに検討しトレーニングしておくことが大切である。さらに、そのような生徒の卒業後の人生を考えたとき、何ら支援を受けることなく社会の中で生きていけそうなのか、何らかの支援を使う方がいいのかの検討や判断、支援が必要であればそこにつなぐことなど、卒業後の自立を見据えた支援が、高校で勤務するS S Wの業務の大きな柱になると考える。そのためには、生徒の在学中から卒業後のその生徒なりの自立を目指した医療機関や福祉機関、就労支援機関などとの連携が重要になる。

現在、本校ではS S Wがフルタイムで勤務しているが、他にS CとC Cがそれぞれ週1日、教育相談C oが月の半分を終日勤務している。また、教育相談に精通した就職支援C oも週3日で勤務している。これに、特別支援教育C oと進路指導部の職員が加わり、毎月「キャリア教育推進委員会」を開催している。そこでは、①職場体験学習の進捗状況確認、②個別支援対象者の経過確認、③それぞれの支援員が面接などを通して気になっている生徒について、の3つを固定した議題としている。校内で支援に対する専門性を有する職員が一同に会する時間を毎月持つことは、直に話せる情報交換の場ができるだけでなく、互いに“顔の見える関係”ができ信頼関係の構築にもつながっている。教育相談C oは、月の半分だが終日勤務しているため、その間はS S Wや就職支援C oなどと随時話すことができ、そこでは“ついでの話”がそのままケース分析に発展することもあり貴重な生徒理解や具体的な支援策の検討の場になっている。

表IV-20は本校のS S Wの職務内容を、生徒の入学時の支援、高校生活を継続するための支援、高校卒業後の自立につなぐための支援と3つに整理したものである。生徒の入学時は中学校までの生徒とその環境についての情報収集が主であり、そこから必要だと思われる入学後の配慮事項や具体的な支援についての支援会を開催している。高校生活を継続するための支援は、不登校や登校しても教室に入れない生徒、緊張の強い生徒などへの個別支援を行ったり、

自主講座「コミュニケーション」でスキルトレーニングを希望者を対象に実施したりしている。また、関係機関と連携して校内で支援会をもつこともあれば、関係機関に請われて校外の支援会に出向くこともある。高校卒業後の自立につながるための支援として、職場体験学習の実施や障害者就業・生活支援センター、サポステへのつなぎや同行なども行っている。

表Ⅳ－２０ 本校のSSWの職務内容(1)

速やかな学校適応のための支援、連携	
○ 中学校や適応指導教室等との情報交換	
高校生活を継続するための支援、連携	
○ 個別支援対象生徒への支援	Well Being Empowerment
○ スキルトレーニング	
○ 自己理解・自己受容（障害、特性など）への支援	Process 評価 18歳
○ 職場体験学習の支援	
○ サポステ、NPO、等	Outcome 評価
○ 障害者就業・生活支援センター、等	
○ 福祉、医療等の関係機関	
卒業後の自立につながるための支援、連携	

表Ⅳ－２１は、本校のSSWの職務内容をミクロ（個人）へのアプローチ、メゾ（学校組織）へのアプローチ、マクロ（自治体）へのアプローチの3つに整理したものである。

表Ⅳ－２１ 本校のSSWの職務内容(2)

個人＝ミクロへのアプローチ
・ 個別支援対象生徒への支援、保護者への支援、家庭訪問、関係機関との連携など
・ スキルトレーニング ・ 教員やSC等との連携、ケース分析
学校組織＝メゾへのアプローチ
・ 教育相談委員会（生徒状況の把握、支援策の検討など）
・ キャリア教育推進委員会（専門性を有する支援員が一同に会する）
自治体の体制＝マクロへのアプローチ
・ 関係機関の依頼による支援会への参加、関係機関を招いての支援会の開催など
・ 関係機関と連携した生徒や保護者、家族システムへの支援など

※ 分類は「児童生徒の教育相談の充実について」（平成29年1月）による

※ 本校での教育相談コーディネーターは、「児童生徒の教育相談の充実について（教育相談等に関する調査協力者会議、平成29年3月報告）」で述べられている、初動段階でのアセスメントや関係者への情報伝達等を行うコーディネーターの役割ではなく、SCのようにカウンセリングを行いながら他のSSWやコーディネーター、教員のスーパーバイザーとしての役割や研究主任的な立場で活動している。

## 第5章 研究のまとめ

### 第1節 成果と課題

#### 調査研究課題〔研究主題〕

定時制・通信制課程における生徒の自立を促す支援・相談体制の構築  
～「自立支援プログラム」「地域連携プログラム」の作成と実践を通して～

#### 1. 成果

- (1) 全職員で授業改善やLHR活動のひとつとして社会性を育成するための活動に取り組むことができた。
- (2) スタディールームや自主講座の開設により、基礎学力の習得やコミュニケーション力、生活のスキルを向上させるための個別指導に取り組むことができた。
- (3) 特性や課題を有する生徒を中心に職場体験学習や個別の支援を行うことができ、その過程で校内連携や関係機関との連携を推進することができた。
- (4) 本校の教育活動のなかで、生徒の学校適応への取り組みに加えて、卒業後の自立も見据えた活動にも取り組もうという視点が出てきた。

これらの取り組みと成果により、生徒の自立を促すための本校の支援・相談体制が、ある程度構築できたと考える。

#### 2. 課題

生徒の自立を促す支援・相談体制をさらに充実させ成果を挙げていくために、これから次のような課題に取り組んでいく必要がある。

- (1) さまざまな取り組みの意義が生徒の中にも浸透し、生徒がより積極的に多く参加するように活動の質を向上させていくこと。
- (2) 生活する上で必要な学力やスキルの効果的な学習ができるような教材や資料の開発をさらに推し進めること。
- (3) 特性や課題を有する生徒、その疑いのある生徒を見据えたキャリア教育の3年間の指導計画を関係機関との連携も含めて作成すること。
- (4) SSWやSC、コーディネーターなど支援のための専門性を有する職員と教員間の連携、支援員相互の連携、校外の関係機関との連携をさらに推し進めること。



# 資 料

## 資料 1. 実態調査（生徒）

### 1. 実態調査（生徒用：質問用紙）

年 月 日実施

#### 生活アンケート

このアンケートは、より良い学校づくりのための課題を探ろうとするものです。それ以外のことには使うことはありません。また、秘密は守られます。  
より良い学校づくりのために、協力をお願いします。

定時・通信（ ）年次 氏名 \_\_\_\_\_（男・女）（ 歳）

#### I. 生活習慣

1. 毎日の睡眠時間は、だいたい何時間くらいですか。            だいたい            時間
2. あなたは、いつも何時頃、起床しますか。            時            分頃
3. あなたは、いつも何時頃、就寝しますか。            時            分頃
4. 次の食事を、だいたい毎日とっているものに○をつけてください。  
朝食 ・ 昼食 ・ 夕食 ・ 夜食
5. 毎日の生活のなかで、もっとも落ちつける場所はどこですか。○をつけてください。  
家（その中で          ） 学校 その他（          ）
6. 毎日の生活のなかで、何をしているときに、もっとも楽しいですか。  
（          ）
7. あなたは、携帯電話やスマホ、ゲーム機のどれかを持っていますか。また、持っている人は、毎日、何時間くらい使っていますか。○をつけて、教えてください。  
持っている（          時間くらい使っている） 持っていない

#### II. 自己

次の質問に、自分が当てはまる所に○をつけてください。

A, B, C, Dは、次のような意味です。

- A：全く、そう思う
- B：だいたい、そう思う
- C：あまり、思わない
- D：全然、思わない

1. 自分に自信がある。	A    B    C    D └───┬───┬───┬───┘
2. 自分が好きだ。	A    B    C    D └───┬───┬───┬───┘
3. 友だちと気楽に話ができる。	A    B    C    D └───┬───┬───┬───┘
4. 人に対して思いやりがある。	A    B    C    D └───┬───┬───┬───┘

5. きちようめんな性格である。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
6. まわりの人の意見に合わせることができる。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
7. 自分の意見を主張することができる。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
8. 私には、私なりの人生があってもいいと思う。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
9. 前向き <small>しせい</small> の姿勢で物事に取り組んでいる。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
10. 毎日の生活 <small>じゆうじつかん</small> に充実感を感じている。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
11. 人間関係をわずらわしいと感じることがある。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
12. 人前 <small>ひとまえ</small> でもありのままの自分を出せる。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
13. 人から何か言われたいか、変な目で見られないかと気にしている。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
14. 自分が立てた計画は、うまくできる自信がある。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
15. 自分がいやになることがある。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
16. 自分はダメな人間だと思ふことがある。	A B C D └───┬───┬───┬───┘
17. たいした理由もなくカッとなることがある。	A B C D └───┬───┬───┬───┘

18. 自分はどんな人間だと思いますか。自由に書いてみてください。

### Ⅲ. 学校生活

次の質問の1. ～4. に、自分が当てはまると思う所に○をつけてください。

A, B, C, Dは、次のような意味です。

A : 全く、そう思う (全く、そうだ)

B : だいたい、そう思う (だいたい、そうだ)

C : あまり、思わない

D : 全然、思わない

1. あなたは、学校（太平洋学園高校）が好きですか。	A   B   C   D └───┬───┬───┬───┘
2. あなたは、学校生活に満足していますか。	A   B   C   D └───┬───┬───┬───┘
3. あなたは、学校に自分の居場所があると感じますか。	A   B   C   D └───┬───┬───┬───┘
4. あなたは、学校にいるとき、緊張 <small>きんちよう</small> しないで楽に落ちついて過ごせていますか。	A   B   C   D └───┬───┬───┬───┘

5. あなたは、学校のなかで、気楽に話せる親しい仲間がいますか。

いる      いない

6. あなたは、学校のなかで、気楽に話せて信頼できる先生がいますか。

いる      いない

7. あなたが、学校のなかで、もっとも落ち着く場所はどこですか。

( \_\_\_\_\_ )

8. あなたが、学校のなかで、もっとも楽しいときは何をしているときですか。

( \_\_\_\_\_ )

9. あなたが、学校生活を通して、できるようになりたいことは何ですか。

( \_\_\_\_\_ )

10. あなたが、学校生活のなかで、やってみたいことは何ですか。

( \_\_\_\_\_ )

11. 学校に対する要望ようぼうや改善かいぜんして欲しいことがあれば、自由に書いてください。

--

#### IV. 進路

次の質問に、自分が当てはまる所に○をつけてください。

A, B, C, Dは、次のような意味です。

A：考えている（決めている）、とても努力している

B：まあまあ考えている、まあまあ努力している

C：あまり考えていない、あまり努力していない

D：全然、考えていない、何もしていない

1. あなたは、卒業後の進路を決めていますか。

例：進学（大学・専門学校）、就職（製造、販売、事務、介護、理・美容、など）

A B C D

2. 自分のこれからの生活（仕事、家庭、余暇<sup>よか</sup>など）について考えることがある。

A B C D

3. 自分の将来に夢や目標を持っている。

A B C D

4. 自分の希望する生き方（仕事、家庭、余暇<sup>よか</sup>など）ができるように努力している。

A B C D

5. あなたは、将来、特にどんなことを大切に過ごしたいと思いますか。

今、自分が思っているものに○をつけてください。

① 家族が仲よく      ② 収入の多い仕事      ③ やりたい仕事をする

④ 楽しさ      ⑤ まだ何も考えていない

6. 将来の進路や過ごし方について、思うことを自由に書いてください。

--

## 2. 実態調査（生徒への実態調査の結果）

平成27(2015)年度 実施結果

回答者の属性（課程別）

	男	女	計
定時制	71	65	136
	28.0%	25.6%	53.5%
通信制	59	59	118
	23.2%	23.2%	46.5%
計	130	124	254
	51.2%	48.8%	100.0%

回答者の属性（年次別別）

	男	女	計
1年次	44	33	77
	33.8%	26.6%	30.3%
2年次	52	40	92
	40.0%	32.3%	36.2%
3年次	28	45	73
	21.5%	36.3%	28.7%
4年次以上	6	6	12
	4.6%	4.8%	4.7%
計	130	124	254
	51.2%	48.8%	100.0%

### I. 生活習慣

#### 1. 毎日の睡眠時間は、どれくらい。

睡眠時間	人数	%
1～3時間	5人	2.0%
4～6時間	100人	39.4%
7～9時間	114人	44.9%
10時間以上	20人	7.9%
無回答	15人	5.9%
計	254人	100.0%

#### 4. 食事をとっているのは

朝食	昼食	夕食	夜食
111人	191人	202人	67人
43.7%	75.2%	79.5%	26.4%

#### 5. 落ち着ける場所は

家	学校	その他
198人	8人	8人
78.0%	3.1%	3.1%

#### 6. 毎日の生活のなかで、何をしているときに、最も楽しいですか。

定時制	通信制
ゲーム(30)	ゲーム(21)
寝るとき(17)	寝るとき(14)
音楽を聴く、音楽活動(15)	インターネット、動画、スマホ(11)
遊ぶ(13)	音楽を聴く、音楽活動(8)
アニメ、TV、DVD(11)	友達たちのおしゃべり(8)
インターネット、動画、スマホ(11)	
なし、楽しくない(7)	なし、楽しくない(7)

( )内は人数、多いものから抜粋

6. 携帯電話・スマホ・ゲーム機の所持

	人数	%
持っている	234 人	92.1%
持っていない	12 人	4.7%
無回答	8 人	3.1%
計	254 人	100.0%

II. 自己

A : 全くそう思う B : だいたいそう思う

C : あまり思わない D : 全然思わない

	A	B	C	D	無回答
1 自信がある (生き方・自尊感情)	6.7%	17.7%	40.6%	33.5%	1.6%
2 自分が好き (自己肯定感)	8.3%	21.7%	36.6%	31.9%	1.6%
3 楽に話せる (社交)	28.0%	38.6%	19.7%	12.6%	1.2%
4 思いやりがある (優しさ)	17.3%	40.9%	26.8%	13.8%	1.2%
5 几帳面 (まじめさ)	13.0%	32.3%	31.9%	21.7%	1.2%
6 人に合わせる (協調)	19.7%	45.7%	23.2%	9.8%	1.6%
7 主張できる (独立)	12.2%	32.7%	30.7%	22.8%	1.6%
8 私なりの人生 (自己受容)	44.9%	38.6%	8.3%	7.1%	1.2%
9 前向き (自己実現的態度)	13.0%	34.6%	35.4%	15.0%	2.0%
10 充実感 (充実感)	17.3%	29.1%	33.1%	18.1%	2.4%
11 人間関係 (自己閉鎖性)	24.8%	32.3%	26.4%	13.8%	2.8%
12 ありのままの自分 (自己表明・対人積極性)	14.6%	28.3%	32.3%	23.2%	1.6%
13 気にする (対人緊張・自意識)	27.2%	30.3%	25.2%	16.1%	1.2%
14 自信がある (自己効力感)	8.7%	28.0%	40.9%	20.9%	1.6%
15 自分がイヤになる (自己嫌悪感)	29.9%	32.3%	22.4%	13.8%	1.6%
16 ダメな人間 (自己否定感)	23.6%	40.6%	18.9%	15.4%	1.6%
17 カッとなる (攻撃性)	19.3%	23.2%	26.8%	29.1%	1.6%

18. 自分はどんな人間だと思いますか。

定時制	通信制
肯定的表現(9)	肯定的表現(8)
否定的表現(13)	否定的表現(12)
課題を表現(29)	課題を表現(21)
わからない(11)	わからない(8)
肯定的表現：やさしい、明るい、がんばってる、など 否定的表現：最低、ダメ人間、うざい、つまらない、など 課題を表現：神経質、気分屋、気が弱い、人見知り、めんどくさがり、など	

( ) 内は人数



### Ⅲ. 学校生活

A : 全くそう思う    B : だいたいそう思う  
 C : あまり思わない    D : 全然思わない  
 (5, 6は、A : いる    B : いない)

	A	B	C	D	無回答
1 学校が好き	26.4%	48.0%	14.6%	8.3%	2.8%
2 学校生活に満足	24.8%	42.9%	18.9%	11.4%	2.0%
3 居場所がある	21.3%	43.3%	22.0%	10.2%	3.1%
4 落ち着いている	31.5%	41.3%	15.0%	9.4%	2.8%
5 親しい仲間がいる	70.1%	23.6%			6.3%
6 信頼できる先生がいる	66.1%	24.8%			9.1%

#### 7. あなたが、学校のなかで、もっとも落ちつく場所はどこか。

定時制	通信制
ホームルーム(32)	ホームルーム(15)
フリールーム(9)	体育館(5)
パソコン室(9)	トイレ(4)
体育館(8)	職員室(4)、進路室(4)
音楽室(7)	パソコン室(3)
保健室(4)	フリールーム(2)
ロビーのソファ(4)	音楽室(2)
トイレ(3)	保健室(2)
職員室(2)	ロビーのソファ(2)
ひとりでいるとき(2)	ひとりでいるとき(2)
友だちといるとき(2)	
なし(28)	なし(32)

( ) 内は人数、多いものから抜粋

#### 8. あなたが、学校のなかで、もっとも楽しいときは何をしているときか。

定時制	通信制
友だちと話す、遊ぶ(35)	友だちと話す、遊ぶ(19)
体育、スポーツ(20)	体育、スポーツ(19)
音楽(7)	授業(6)
授業(6)	スマホ、ゲーム、携帯(4)
スマホ、ゲーム、携帯(6)	パソコン室(3)
先生と話す(5)	音楽、美術(3)
休み時間(5)	休み時間(3)
なし(18)	なし(22)

( ) 内は人数、多いものから抜粋

9. あなたが、学校生活を通して、できるようになりたいことは何か。

定時制	通信制
勉強(17)	勉強(22)
英語(4)、資格(2)、情報(2)	数学(2)、パソコン(2)、資格、英語
コミュニケーション力(16)	コミュニケーション力(8)
早寝・早起き、欠席をしない、卒業したい、自立できるようになりたい、 汽車にひとりで乗る、内向きな性格の改善、など	
なし、わからない(39)	なし、わからない(32)

( )内は人数、多いものから抜粋

10. あなたが、学校生活のなかで、やってみたいことは何か。

定時制	通信制
運動、体育(6)	勉強(2)
友だちづくり(2)	資格(2)
勉強(2)	美容(2)
	パソコン(2)
部活動、体育祭、学校行事への参加、ボランティア活動、アルバイト、など	
なし、わからない(70)	なし、わからない(46)

( )内は人数、多いものから抜粋

IV. 進路意識

A：考えている B：まあまあ考えている

C：あまり考えていない D：全然考えていない

	A	B	C	D	無回答
1 進路を決めている	26.0%	31.5%	20.9%	17.7%	3.9%
2 将来を考えることがある	29.5%	36.6%	16.9%	13.4%	3.5%
3 夢や目標を持っている	28.7%	27.6%	21.3%	18.9%	3.5%
4 努力している	18.5%	39.0%	24.4%	13.8%	4.3%

5. 将来、どんなことを大切にしたいか。

	%
1 家族が仲良く	17.3%
2 収入の多い仕事	6.7%
3 やりたい仕事をする	17.7%
4 楽しさ	19.7%
5 まだ何も考えていない	20.5%
無回答等	18.1%

## 平成 27 (2015) 年度と 28 (2016) 年度の実施結果比較

回答について、全くそう思う（4点）、だいたいそう思う（3点）、あまり思わない（2点）、全然思わない（1点）として入力し平均値を算出した。

### Ⅱ. 自己

	年度	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
1. 自信がある	2015	254	1.945	.9180	.0576
	2016	251	2.096	.8938	.0564
2. 自分が好き	2015	254	2.031	.9653	.0606
	2016	251	2.131	.9605	.0606
3. 楽に話せる *	2015	254	2.795	1.0241	.0643
	2016	251	3.000	.9423	.0595
4. 思いやりがある	2015	254	2.594	.9683	.0608
	2016	251	2.673	.9364	.0591
5. 几帳面	2015	254	2.343	.9964	.0625
	2016	251	2.410	.9268	.0585
6. 人に合わせる *	2015	254	2.720	.9434	.0592
	2016	251	2.892	.8297	.0524
7. 主張できる	2015	254	2.311	1.0068	.0632
	2016	251	2.410	.9934	.0627
8. 私なりの人生	2015	254	3.189	.9429	.0592
	2016	251	3.287	.9063	.0572
9. 前向き	2015	254	2.417	.9612	.0603
	2016	251	2.554	.9122	.0576
10. 充実感	2015	254	2.409	1.0471	.0657
	2016	251	2.566	.9791	.0618
11. 人間関係	2015	254	2.626	1.0843	.0680
	2016	251	2.669	1.0267	.0648
12. ありのままの自分	2015	254	2.311	1.0339	.0649
	2016	251	2.442	.9714	.0613
13. 気にする	2015	254	2.661	1.0796	.0677
	2016	251	2.725	1.0001	.0631
14. 自信がある	2015	254	2.213	.9251	.0580
	2016	251	2.247	.9395	.0593
15. 自分がイヤになる	2015	254	2.752	1.0768	.0676
	2016	251	2.841	1.0347	.0653
16. ダメな人間	2015	254	2.693	1.0446	.0655
	2016	251	2.809	1.0016	.0632
17. カットとなる	2015	254	2.295	1.1296	.0709
	2016	251	2.450	1.1066	.0698

自己イメージについて、年度によるt検定を行った。有意水準5%で有意差は認められた項目は、3と6であった（図中項目の\*、以下同様）。

### Ⅲ. 学校生活

	年度	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
1, 学校が好き	2015	254	2.858	.9839	.0617
	2016	251	2.968	.9503	.0600
2, 学校生活に満足	2015	254	2.736	1.0202	.0640
	2016	251	2.853	.9870	.0623
3, 居場所がある	2015	254	2.701	1.0045	.0630
	2016	251	2.757	.9802	.0619
4, 落ち着いている	2015	254	2.902	1.0303	.0646
	2016	251	2.968	1.0035	.0633

学校生活について、年度による t 検定を行ったが、有意水準 5% で有意差は認められなかった。

			5, 親しい仲間			合計
			無回答	いる	いない	
年度	2015	度数	16	178	60	254
		年度の %	6.3%	70.1%	23.6%	100.0%
	2016	度数	8	183	60	251
		年度の %	3.2%	72.9%	23.9%	100.0%
			6, 信頼できる先生			合計
			無回答	いる	いない	
年度	2015	度数	21	168	63	252
		年度の %	8.3%	66.7%	25.0%	100.0%
	2016	度数	12	190	49	251
		年度の %	4.8%	75.7%	19.5%	100.0%

生徒どうしの関係について「親しい仲間がいる」と答えた生徒は、2015 年度に比べて 2016 年度の方が少し高くなっている。教員との関係について「信頼できる先生がいる」と答えた生徒は、2015 年度に比べて 2016 年度の方が 10 ポイント弱高くなっている。

### Ⅳ. 進路意識

	年度	度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
1, 進路を決めている *	2015	254	2.587	1.1620	.0729
	2016	251	2.801	1.0845	.0685
2, 将来を考えることがある *	2015	254	2.764	1.1243	.0705
	2016	251	3.000	.9550	.0603
3, 夢や目標を持っている	2015	254	2.591	1.1852	.0744
	2016	251	2.661	1.0885	.0687
4, 努力している	2015	254	2.543	1.0762	.0675
	2016	251	2.562	1.0541	.0665

進路について、年次による t 検定を行った。有意水準 5% で有意差は認められた項目は、1 と 2 である。いずれも 2016 年度の方が高い数値となっている。

### 資料3. 実態調査（職員の意識調査と、その結果）

職員アンケート〔1〕 平成27年 9月 実施

#### 1. アンケート項目と、その結果

回答者数 21名（内、1名はA, B, C未記入）

ここ数年の本校の卒業生を振り返ってみて回答してください。細かく思い出していただく必要はありません。だいたいところでイメージして回答してください。

A：10人以上

B：5人～9人

C：0～4人

1. 仕事に継続して就労し、社会のなかで生きていくための基礎学力（読み・書き・計算・一般常識など）が充分でないまま卒業したのではないかと思われる生徒の数。	A	16人	76.2%
	B	4人	19.0%
	C	0人	0.0%
2. 社会のなかで円滑な人間関係を維持していくためのコミュニケーション能力が充分でないまま卒業したのではないかと思われる生徒の数。	A	16人	76.2%
	B	4人	19.0%
	C	0人	0.0%
3. 社会のなかで主体的に活動するための社会的なスキル（役所などの利用、交通機関の利用、カードや通販などの仕組みなど）の獲得が充分でないまま卒業したのではないかと思われる生徒の数。	A	11人	52.4%
	B	9人	42.9%
	C	0人	0.0%
4. 社会のなかで逸脱しないための規範意識やマナーの獲得が充分でないまま卒業したのではないかと思われる生徒の数。	A	5人	23.8%
	B	10人	47.6%
	C	5人	23.8%
5. 社会のなかで自立していこうとする積極性や勤労への意欲が十分に育っていないまま卒業したのではないかと思われる生徒の数。	A	11人	52.4%
	B	4人	19.0%
	C	5人	23.8%

6. 卒業後、生徒が社会の中で自立していくために、本校在学中に獲得して欲しいことはどんなことですか。できるだけ、具体的に書いてください。〔※ 主なものを集約〕
<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会のなかで生きていくための基礎学力。</li> <li>・あいさつや返事、お礼などが表情や仕草を伴ってできる。</li> <li>・コミュニケーション力。自分の気持ちを表現できる。相談したり援助を求めたりできる。</li> <li>・社会的スキル（買い物、公共交通機関の利用、金銭感覚など）。</li> <li>・ある程度、自己を開示し他者と結ぼうという意識。</li> <li>・他者との違いを受け入れ共感する力（理解でなく）。他者が居るという自覚。協調性。</li> <li>・マナー、TPOに応じたふるまい、規範意識。</li> <li>・社会とつながろうとする力、社会の中で前向きに生きていこうとする力。</li> <li>・学ぼうとする姿勢。失敗をおそれずチャレンジすること。</li> <li>・イヤなことでも時にはガマン、協力して最後までやり遂げる気持ちと行動。</li> </ul>

職員アンケート〔2〕 平成27年11月 実施

1. アンケート項目と、その結果

回答者数 27名

1. 次の質問に、あてはまると思うところに○をつけてください。				
A：全くそう思う B：だいたいそう思う C：あまり思わない D：全然思わない				
質 問 項 目	A	B	C	D
(1) 生徒の基礎学力を高めるための教材や資料を、さらに整理し作成する必要がある。	37.0%	48.1%	7.4%	3.7%
(2) 生徒の社会的なスキルを高めるための教材や資料を、さらに整理し作成する必要がある。	59.3%	33.3%	3.7%	0.0%
(3) 生徒の心理的な課題や障がいに応じた教材や資料を工夫し、状況に応じて使えるように整備しておきたい。	44.4%	44.4%	3.7%	3.7%
(4) 生徒の基礎学力を高めるための指導や職員間の連携を、さらに充実させる必要がある。(教科内、教科間、学校行事などで)	59.3%	29.6%	3.7%	3.7%
(5) 生徒の社会的なスキルを高めるための指導や職員間の連携を、さらに充実させる必要がある。(授業、学校行事などで)	55.6%	37.0%	0.0%	3.7%
(6) 生徒の基礎学力を高めるための指導計画と実施が、学校全体として、より機能的にできるようにしていく必要がある。	63.0%	25.9%	3.7%	3.7%
(7) 生徒の社会的なスキルを高めるための指導計画と実施が、学校全体として、より機能的にできるようにしていく必要がある。	59.3%	33.3%	0.0%	3.7%
(8) 生徒のキャリア形成のための指導が、より効果的になるためには校内だけでなく校外の資源も活用し連携する必要がある。	59.3%	33.3%	3.7%	0.0%

2. 生徒の自立を促すために、生徒とうまくかかわっていくために必要だと思う、また、あったらいいと思う教材や資料は、どんなものですか。 [ ※ 主なものを集約 ]
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ SSTやピアサポート、プロジェクトアドベンチャーなどの資料や教材。</li> <li>・ 生徒への支援ツールとしてプロジェクター、ノートPCなど最新機器の整備。</li> <li>・ 家庭学習教材。 ・ 生徒の実態に即した自校作成の基礎学力等の問題集。</li> <li>・ 楽しく取り組めるもの(教員も交えて生徒と“一緒に”取り組めるもの)。</li> <li>・ バイトの体験交流会。 ・ 身近な卒業生のことば。</li> <li>・ 各教科・科目の教材や教具を充実させる。</li> </ul>

3. 生徒の自立を促す教育活動を通して、本校がさらに発展していくための課題は何だと思いますか。できるだけ具体的に書いてみてください。 [ ※ 主なものを集約 ]
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1→2→3→4→目標。ステップアップでのスキルトレーニングの導入。</li> <li>・ 人とのかかわり、コミュニケーション、対話のしかた、など。</li> <li>・ 最低限のルール、マナー教育。人の話を聴く。</li> <li>・ イヤなことでもとりあえずは取り組む。 ・ 簡単なことでも出来たらホメる。</li> <li>・ 目標や目的を見つけられるきっかけづくり。</li> <li>・ 基礎学力もそうだが、教材を身近なものを使う。</li> <li>・ 学習活動を生徒の自立とかかわらせて考える。</li> <li>・ 卒業後の生活を具体的に学ぶ、検討する機会を設ける。</li> <li>・ 生徒との人間関係づくり ・ 支援の意識は強く、もしくは“一緒に”の意識を強める。</li> <li>・ 授業の教材研究。授業や行事等の反省。・ 行事ごとの目的や目標を明確に設定して実施する。</li> <li>・ 教員同士の共通理解、連携。 ・ 時間や心の余裕が必要。</li> </ul>







6. 本校にはスクール・ソーシャル・ワーカー〔SSW〕が常勤していることをご存じですか。

- ① 知っている    ② 知らない

7. スクール・ソーシャル・ワーカー〔SSW〕の業務内容はどのようなものだと考えられますか。

8. 生徒やその保護者への支援を行うのに、貴機関とどのような連携が大切だと思われますか。

9. 貴機関と本校と合同で「支援会」（課題を抱える生徒に対する個別支援のためのケース会議）を持つときの会の進め方や参加メンバーや時間などについての課題や改善点、ご要望などがあればお書きください。

10. 生徒やその保護者への支援をより適切に効果的なものにするための連携のあり方についてご意見やご要望があればお書きください。

11. その他、本校に対するご要望やご意見があれば、自由にお書きください。

ご協力、ありがとうございました。

## 2. 関係機関との連携に関する調査結果

[回収率：72.9%，35/48 ≙ 0.7291 …]

### 1. 本校との連携の満足度は

平均点	81.9 点
記述内容から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路の厳しい生徒を受け入れてくれる。</li> <li>・生徒を中心とした教育活動が実践されている。</li> <li>・本校（教員）とスムーズな情報共有がなされ進路指導に活かされている。</li> <li>・課題のある生徒にも個別な対応をしてくれる。</li> <li>・課題のある生徒について情報を交換しあい、うまく連携できている。</li> <li>・情報発信をこまめに行っている。詳細な説明がある。</li> <li>・毎年、高校説明会に来てくれている。</li> <li>・校長と連絡が取りやすい。</li> <li>・各機関との密な関係が保てている。本音で話せる。</li> <li>・本校に入学した生徒に関して、話し合いなどの関わりができていない。</li> <li>・中学校側や支援機関からの連携が不十分。連絡会などに参加できていない。</li> <li>・高校説明会などでの連携が不十分。</li> <li>・学校以外の支援機関への情報交流や行事の案内が不十分。</li> <li>・ケースによってばらつきがある、</li> <li>・本校の特徴や生徒の個性を引き出すような活動に協力できなかった。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体としての満足度は高い。</li> <li>・中学校では、入学前・入学直後の連携の評価は高いが、その後の高校生活についての連携に少し課題がある。</li> <li>・中学校以外の支援機関では、連携に対する評価は高いが、本校の案内や行事の広報などが不十分。</li> </ul>

### 2. 連携、情報交換や意思疎通はうまくいっていると思われるか。

①とても思う	20 人	57.1 %
②まあまあ思う	13 人	37.1 %
③あまり思わない	2 人	5.7 %
④まったく思わない	0 人	0.0 %
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校との連携、情報交換や意思疎通がとてもうまくいっている、まあまあうまくいっていると肯定的に評価した機関が 94.3 % と高かった。</li> </ul>	

### 3. 本校は連絡を取りやすい、オープンだと思われるか。

①とても思う	22 人	62.9 %
②まあまあ思う	13 人	37.1 %
③あまり思わない	0 人	0.0 %
④まったく思わない	0 人	0.0 %
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全ての中学校や支援機関が、本校は連絡を取りやすい、オープンだと肯定的に評価した。</li> </ul>	

4. 連絡、情報の提供や相談、問い合わせに対する対応などは速やかに、適切になされていると思うか。

①とても思う	23 人	65.7 %
②まあまあ思う	12 人	34.3 %
③あまり思わない	0 人	0.0 %
④まったく思わない	0 人	0.0 %

まとめ	・全ての中学校や支援機関が、本校の相談や問い合わせに対する対応が速やかに、適切になされていると肯定的に評価した。
-----	--

5. 個別支援のための「支援会」の開催は適切になされているか。

①とても思う	14 人	40.0 %
②まあまあ思う	11 人	31.4 %
③あまり思わない	4 人	11.4 %
④まったく思わない	1 人	2.9 %

記述内容から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「支援会」のことを知らない。参加したことがない。</li> <li>・細やかな支援がなされていると思う。</li> <li>・「支援会」が適切に開催されている。</li> <li>・中高連絡会や家庭訪問、職員の話などから適切に開催されていると思う。</li> <li>・入学時の「支援会」はあるが、それ以外はない。</li> <li>・幅広い視野に立って支援が検討されている。</li> <li>・関係機関とうまく連携しながら丁寧なサポートを行っている。</li> <li>・ケース検討会議への出席を依頼すると参加してくれる。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「支援会」のことを知らない、参加したことがないという回答が多かった。</li> <li>・肯定的な回答が多かったが、「できているだろう」との想像によるものだと判断される。</li> </ul>

6. 本校にはスクール・ソーシャル・ワーカー〔SSW〕が常勤していること知っているか。

①知っている	26 人	74.3 %
②知らない	8 人	22.9 %

まとめ	・本校にSSWが常駐していることを知っているのは全体の4分の3程度だった。
-----	---------------------------------------

7. スクール・ソーシャル・ワーカー〔SSW〕の業務内容はどのようなものだと考えられるか。

記述内容から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校、生徒、保護者のさまざまな課題解決のため専門的な知識を生かして相談活動や関係機関との連携を図る。</li> <li>・生徒との面談、カウンセリングや家庭訪問など。生徒や家族への相談。</li> <li>・学校と地域をつなぐ架け橋、保護者と教職員の橋渡し、など。</li> <li>・生徒の抱える問題に対して制度やサービス、環境面からの支援を考える。</li> <li>・福祉や家庭、学校をつなぐコーディネーター的な仕事を行う。</li> <li>・支援のコーディネート、施設見学などへの同行。</li> <li>・支援ニーズの掘り起こしと整理、関係機関との連携の窓口、状況の確認など。</li> <li>・中学校におけるSSWと同じ内容だと考える。</li> </ul>
まとめ	・生徒本人だけでなく、その環境調整のために保護者（家庭）や地域に働きかけ、さまざま支援機関へつなぐ・連携する、コーディネートするというとらえ方が多かった。（SSWの業務内容についての理解は得られていると考えられる。）

8. 生徒やその保護者への支援を行うのに、どのような連携が大切だと思われるか。

記述内容から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学前後で、中学校生活に対する細やかな情報交換、情報共有、意思疎通。</li> <li>・担当者間でのスムーズな情報共有。引き継ぎに来校して欲しい。</li> <li>・入学後の学校生活のようすの連携…難しい。</li> <li>・「支援会」の内容などを話す場を持ち、共に助け合っているような連携。</li> <li>・中学校に、こまめに気楽に連絡をして欲しい。</li> <li>・SCやSSWとの連携。</li> <li>・心情、家庭状況を的確に把握し、適切なアドバイスを行う。</li> <li>・管理職や教職員間での良好な関係の構築、報告・連絡・相談ができる。</li> <li>・各ケースに応じた支援会の開催。</li> <li>・高度な専門的見地からの「見立て」に基づいた支援が必要。</li> <li>・タイムリーな支援ができるように日常的なやり取りで関係をつくっておく。</li> <li>・支援機関を紹介するだけでなく、具体的な支援ができるような連携が必要。</li> <li>・さまざまな支援機関の専門性や役割を理解し、情報提供や適切な支援ができるような関係をつくっておく。</li> <li>・問題が発覚したら速やかに情報共有し必要な措置や見通し等を検討、協同と役割分担を確認する。</li> <li>・チームのような形で緊密な連携や情報交換で問題を共有する。</li> <li>・高校卒業後の追指導。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学前後での情報交換の必要性が多く指摘された。</li> <li>・ケースに応じてタイムリーな支援、そこでの情報交換や情報共有だけでなく、専門的な「見立て」に基づいた具体的な支援、協同、役割分担の必要性も指摘された。</li> <li>・高校卒業後の支援についての連携も指摘があった。</li> </ul>

9. 貴機関と本校と合同で「支援会」（課題を抱える生徒に対する個別支援のためのケース会議）を持つときの会の進め方や参加メンバーや時間などについての課題や改善点、要望など。

記述内容から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「支援会」の目的と役割分担を明確にすること。</li> <li>・医療、心理、特別支援教育などの専門性を有する人物の参加が必要。</li> <li>・参加メンバーは、管理職、補導専任、子ども家庭支援センター、児童相談所、警察、少年サポートセンター、医者、弁護士などから。</li> <li>・中学校との支援会では、中学校から教頭と生徒と関係のある職員2名程度、高校から教頭または部長、担任、学年主任など。学校生活のようす、家庭の状況、今後の支援について60分程度で実施する。実施時期は、放課後に時間帯や長期休業中が望ましい。</li> <li>・日常から生徒理解に努め、互いに顔の見える関係性をつくっておくことが重要。</li> <li>・単発では成果を上げることが難しいので継続した形で実施できればいい。</li> <li>・人事異動に伴い、生徒を知る職員が少ないことが多い。</li> <li>・学校が多忙で「支援会」などへの参加が困難。</li> <li>・プライバシーの保護の観点からガラス張りの教室での「支援会」は再検討？</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校との「支援会」では、参加者や時間の確保などに課題が示された。</li> <li>・「支援会」が効果的に機能するためには、日頃から信頼関係を持つておくことの大切さが指摘された。</li> <li>・「支援会」には、さまざまな立場の支援機関や専門性を有する人に参加を求めるとの必要性が指摘された。</li> <li>・単発でなく継続して「支援会」を持つことの必要性が指摘された。</li> <li>・「支援会」の会場への配慮が指摘された。</li> </ul>

10. 生徒やその保護者への支援をより適切に効果的なものにするための連携のあり方についての意見や要望など。

記述内容から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校関係者だけでなく、さまざまな立場のスタッフの関わりが必要。</li> <li>・生徒の内なる声を聞ける人に話をしていただき内面を探る。</li> <li>・家庭訪問を積極的に行う。場合によっては心理面での保護者への支援を行う。</li> <li>・中学校や教育研究所でのようすを伝える場の設定があればいい。</li> <li>・支援会や情報共有会をしていく。</li> <li>・合同の支援会の開催。</li> <li>・問題がなくても学期途中で連絡会を持ち話をする機会があればいい。</li> <li>・生徒に寄り添い、生徒や保護者から情報収集、学校として見立てなどを（支援機関に）伝えて欲しい。そこから共に支援を考えていきたい。</li> <li>・連携して良かったこと、課題、反省点などを検討する機会が常にあるといい。</li> <li>・連絡を、きめ細やかに行う。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな立場の支援者を交えて支援を行うことの必要性が指摘された。</li> <li>・こまめに連絡を取り合い、話し合う機会を持つことが大切だと指摘された。</li> <li>・個々のケースで支援や連携のあり方について、常に評価・検討することの重要性も指摘された。</li> </ul>

11. その他、本校に対する要望や意見など。

記述内容から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援を要する生徒を受け入れていただき感謝している。</li> <li>・体験入学や個別相談で親切丁寧に対応していただき感謝している。</li> <li>・さまざまな講演や研修などの機会を設けていただき感謝している。</li> <li>・教育支援センター推薦者の情報は中高連絡会の時以外にも欲しい。</li> <li>・入試日程、学費（減免制度）などについて、学校外（福祉）の支援機関にも知らせて欲しい。</li> <li>・オープンスクールやイベント等の情報は、学校外（福祉）の支援機関にも知らせて欲しい。</li> <li>・生徒や保護者を同行しての支援機関への訪問は、事前に日程調整をして欲しい。</li> </ul>
--------	---

**総括**

- (1) 中学校や支援機関などとの連携については、全体としての評価は高く、好意的なものが多い。
- (2) 入学前後の情報交換についての必要性は強く指摘され、その実施についても全体としては評価されている。
- (3) 課題を抱える生徒への支援を検討する「支援会」について、理解を得ているとは言えない。特に、中学校での理解が弱い。
- (4) 「支援会」が情報交換で終わることなく、適切な見立て（アセスメント）に基づく具体的な支援策の検討と、協同や役割分担ができるような会の持ち方、進行の仕方について検討する必要がある。
- (5) 学校案内、入試日程、学費（減免制度）、オープンスクール、学園祭などのイベントの情報は、学校外（福祉や就労など）の支援機関にも広報することを検討する必要がある。

## 資料4. S S Wの業務についての調査

### 1. S S Wの業務についての調査用紙 ※ 高校用は質問2を除き同じ様式で別途作成

太平洋学園高等学校

### 幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校・その他（支援機関など）用

複数の学校を担当されている方は、そのなかの一校を取り上げて回答をお願いします。

### S S Wの業務についてのアンケート

1. あなたはS S Wとして、どのような勤務形態ですか。

- ① 単独校方式
- ② 拠点校方式（拠点となる学校に配置され、併せて近隣校を対象校として担当）
- ③ 派遣方式（教育委員会に配置され、学校からの要請に応じて派遣）
- ④ 巡回方式（教育委員会に配置され、複数校を定期的に巡回）
- ⑤ その他（\_\_\_\_\_）

2. あなたのS S Wとしての対象校種は何ですか。

- ① 幼稚園                      ② 小学校                      ③ 中学校
- ④ 特別支援学校                      ⑤ その他（\_\_\_\_\_）

3. S S Wとして、ひとつの学校で1日の勤務時間は、どれくらいですか。

- ① 1日 \_\_\_\_\_ 時間（勤務する時間帯は：\_\_\_\_\_ ～ \_\_\_\_\_）
- ② 特に規定なし（状況に応じて）

4. S S Wとして、ひとつの学校に勤務する頻度はおおよそ、どれくらいですか。

- ① \_\_\_\_\_ 週に \_\_\_\_\_ 回                      ② \_\_\_\_\_ 月に \_\_\_\_\_ 回                      ③ 要請に応じて

5. 学校側のS S Wの担当者（窓口）は、どなたでしょうか。

- ① 校長                      ② 教頭                      ③ 教育相談係（特別支援教育コーディネーターを含む）
- ④ 養護教諭                      ⑤ その他（\_\_\_\_\_）

6. 校内の支援会（ケース会議）の構成メンバーはどうなっていますか。

--

7. S S Wとして関わった事例で多いものから4つ選んでください。

- ① 経済的困窮に対する支援（福祉サービス：生活保護や補助金の利用など）
- ② 医療に対する支援（疾病、発達障害などの確認や対処、医療機関へのつなぎなど）
- ③ 子育てに対する支援（虐待、児童相談所や関係機関との連携など）
- ④ 保護者間（夫婦間、複数の世帯の保護者間）の課題に対する支援など
- ⑤ 学校（職員）と家庭との関係改善に対する支援
- ⑥ 子ども間のいじめや友人関係、非行や怠学などの改善に対する支援
- ⑦ 子どもの進路や学習に対する支援（上級学校への訪問や放課後の学習支援、就労支援など）
- ⑧ 登校が不安定な子ども（不登校、不登校傾向）宅への家庭訪問。
- ⑨ 別室登校の子どもへの支援（学習支援や自習監督など）。
- ⑩ その他（\_\_\_\_\_）

--	--	--	--



8. SSWとして支援のタイプで多いものから3つ選んでください。

- ① 子どもへの面談や家庭訪問などを通しての直接的な支援
- ② 保護者や家族への面談や家庭訪問を通しての直接的な支援
- ③ 個々の先生方と、個別に子どもや家庭への支援を検討する間接的な支援
- ④ 校内での支援会（ケース会議）などを開催して先生方と支援策を検討する間接的な支援
- ⑤ 関係機関との連絡や調整（支援依頼や情報交換など）
- ⑥ その他（ \_\_\_\_\_ ）

--	--	--

9. 事例について、スクールカウンセラー（SC）との連携やケース分析はなされていますか。

- ① 密にできている      ② まあまあできている
- ③ あまりできていない      ④ 全くできていない

具体的には、どんなふうになされていますか。

10. 学校や教職員との関係で感じる課題にはどんなことがありますか。

11. 関係機関との連携で感じる課題にはどんなことがありますか。

12. SSWとしての支援で、印象に残っている事例があればお書きください。

（成果や課題、困難を感じたこと、など）

13. その他、SSWの活動やそれを取り巻く状況（勤務形態、学校、教職員、行政、関係機関など）について、ご意見や課題など自由にお書きください。

ご協力、ありがとうございました。

## 2. S S Wの業務についてのアンケート集計結果

回収率	25 / 67	37.3%
-----	---------	-------

### 1. S S Wとしての勤務形態

① 単独校方式	2人	8.0%
② 拠点校方式	3人	12.0%
③ 派遣方式	14人	56.0%
④ 巡回方式	6人	24.0%
⑤ その他	0人	0.0%

結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・派遣方式の勤務形態が最も多かった。</li> <li>・単独校方式は高校のみであった。</li> <li>・保育園、幼稚園、小学校、中学校は拠点校方式、派遣方式、巡回方式のいずれもあった。</li> <li>・派遣方式は中学校で多く、拠点校方式は小学校で多い傾向があった。</li> </ul>
----	---

### 2. S S Wとしての対象校種

① 保育園、幼稚園	10人	40.0%
② 小学校	17人	68.0%
③ 中学校	17人	68.0%
④ 特別支援学校	0人	0.0%
⑤ その他	0人	0.0%
⑥ 高等学校	4人	16.0%

結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校と中学校を対象としているS S Wが多かった。</li> <li>・保育園や幼稚園を対象としているS S Wも40.0%であった。</li> <li>・高等学校は他の校種と比較すると、未だS S Wの導入が進んでいない。</li> </ul>
----	--

### 3. ひとつの学校での勤務時間

① 2時間	1人	4.0%
② 3時間	2人	8.0%
③ 4時間	3人	12.0%
④ 5時間	2人	8.0%
⑤ 6時間	4人	16.0%
⑥ 7時間	2人	8.0%
⑦ 8時間（全日）	0人	0.0%
⑧ 状況に応じて	13人	52.0%

結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとつの学校での勤務時間は特に規定はなく状況に応じてというのが全体の半数を超えた。これは学校からの要請に応じて活動する派遣方式が多い（56.0%）ため、ケースの内容によって学校での滞在時間が変わるためと考えられる。</li> <li>・一日の勤務時間が決まっている場合は、ほぼ半日（4時間以内）とほぼ全日（4時間以上）が同じ割合となった。</li> </ul>
----	--

#### 4. S S Wとして、ひとつの学校に勤務する頻度

① 週に1回	5人	20.0%
② 週に2回	4人	16.0%
③ 週に3回	2人	8.0%
④ 週に4回	2人	8.0%
⑤ 月に1回	0人	0.0%
⑥ 月に2回	1人	4.0%
⑦ 要請に応じて	11人	44.0%

結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・派遣方式のS S Wが多いため、要請に応じて勤務する割合が高い。</li> <li>・ひとつの学校に勤務する頻度が多かった（週に4回）のは拠点校方式と回答したS S Wだった。</li> <li>・拠点校方式以外で勤務日が決まっている場合は週1～2回の勤務が多い。</li> </ul>
----	---

#### 5. 学校側のS S Wの担当者（窓口）

① 校長、園長	8人	32.0%
② 教頭	6人	24.0%
③ 教育相談係、C o	11人	44.0%
④ 養護教諭	11人	44.0%
⑤ その他	1人	4.0%

C o：特別支援教育コーディネーター

← 註：児童支援

結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校側の窓口が管理職の学校と教育相談係や特別支援教育コーディネーター、養護教諭などの実務者になっている学校に分かれた。</li> <li>・派遣方式では窓口が管理職（校長・園長、教頭）とする割合が75.0%であった。</li> </ul>
----	---

#### 6. 校内の支援会議（ケース会議）のメンバー

※ 括弧（ ）内の数は件数

内容	<p>管理職（18）、教育相談係（1）、養護教諭（19）、学年主任（5）、担任（12）、特別支援教育コーディネーター・児童支援教諭（9）、不登校担当（2）、関係する教員（1）、生徒指導（4）、各学年の担当職員（5）、人権主任（1）、S C（14）、S S W（14）、教育研究所（2）、人権教育課S V（1）</p> <p>・わからない（1）、参加実績なし〔関係機関を交えての支援会は参加〕（1）、</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの学校で支援会議には管理職と養護教諭が入っている。</li> <li>・S S WやS Cも支援会に参加しているが、一方で、S S Wが校内の支援会のメンバーを知らない・参加したことがないというコメントもあった。</li> <li>・管理職と養護教諭のほかに数名のメンバーを固定し、あとはケースに応じて関係する教員の参加を加えて支援会を行っている学校も多い。</li> <li>・養護教諭が特別支援教育C oとなっている学校もある。</li> </ul>

## 7. SSWとして関わった事例

① 経済的困窮	8人	32.0%
② 医療への支援	12人	48.0%
③ 子育て	15人	60.0%
④ 保護者間の課題	1人	4.0%
⑤ 学校と家庭の課題	9人	36.0%
⑥ 子ども間の課題	8人	32.0%
⑦ 進路の課題	8人	32.0%
⑧ 不登校（家庭訪問）	23人	92.0%
⑨ 別室登校への支援	8人	32.0%
⑩ その他	1人	4.0%

← 註：小学校・保育所との連携

結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SSWが関わる事例としては不登校が圧倒的に多かった。</li> <li>・拠点校方式のSSWでは不登校と別室登校への支援が多かった。</li> <li>・派遣方式のSSWでは不登校と子育て、学校と家庭の課題への支援が多かった。</li> <li>・巡回方式のSSWでは不登校と別室登校、子育てへの支援が多かった。</li> <li>・高校では、不登校と医療、進路の課題への支援が多かった。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心理的な要因はともかく、現象としての対応は不登校が圧倒的に多い。</li> <li>・派遣方式は学校からの要請に基づいて行われるため、学校と家庭の課題や子育てへの支援が多いと思われる。</li> <li>・巡回方式や拠点校方式ではSSWの学校訪問日が事前に分かっているため、別室登校している子どもへの支援が多くなっていると思われる。</li> <li>・高校では、子どもの年齢や発達段階から、自己の特性の理解や受容そして卒業後の自立につなぐための医療機関へのつながりや就職・進学につなぐ支援が多いと思われる。</li> </ul>

## 8. SSWとして関わった支援のタイプ

① 子どもへの支援	17人	68.0%
② 保護者への支援	15人	60.0%
③ 個々の先生方への支援	13人	52.0%
④ 校内支援会での支援	12人	48.0%
⑤ 関係機関との連携	15人	60.0%
⑥ その他	0人	0.0%

結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SSWとして関わった支援のタイプはさまざまであった。</li> <li>・拠点校方式では子どもへの支援や保護者への支援が多かった。</li> <li>・派遣方式では保護者への支援や個々の先生方への支援が多かった。</li> <li>・巡回方式では子どもへの支援、校内支援会での支援、関係機関との連携が多かった。</li> <li>・高校では子どもへの支援が多かった。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・派遣方式では学校で生じたケースに対して派遣要請されるため、学校と家庭の間の課題や、その対応にあたる職員への支援が多いと思われる。</li> <li>・巡回方式ではSSWの勤務日が事前に決まっているため、直接的に子どもとかかわり、そこから支援会や関係機関につなげる流れもあると思われる。</li> <li>・高校では、子どもとかかわり、そこから医療機関や進路への支援につなげるというケースが多いと思われる。子どもの年齢や高校生という状況では、保護者や家庭への支援より、先ず子どもへの直接的なアプローチからが自然な流れかと考えられる。</li> </ul>

## 9. SCとの連携やケース分析はなされているか

① 密にできている	6人	24.0%
② まあまあできている	8人	32.0%
③ あまりできていない	4人	16.0%
④ 全くできていない	6人	24.0%

結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・40%がSCとの連携がうまくとれていないと回答している。</li> <li>・拠点校方式ではSCとの連携がうまくできている回答だった。(100%)</li> <li>・派遣方式では連携ができている(41.6%)とできていない(58.3%)に分かれた。</li> <li>・巡回方式では連携できているとした回答(66.7%)が多かった。</li> <li>・高校では連携ができている(50.0%)とできていない(50.0%)に分かれた。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SSWとSCの勤務日が同じ学校では共に支援会に参加したり情報共有ができているが、勤務日が異なる学校では連携がうまくいっていないことが明確になった。</li> <li>・SCとの勤務日が異なるため学校を通して伝達を依頼したり、個人的に電話をしたりして連携を図ろうとしているSSWでも、もどかしさを感じている。</li> </ul>

## 10. 学校や教職員との関係で感じる課題

※ 括弧( )内の数は件数

内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SSWの業務や役割、活用の仕方などについての理解、周知(6)。</li> <li>・学校や教員との関係づくり(3)。</li> <li>・常勤でないので情報が限られる(1)。</li> <li>・学校の閉鎖性〔情報を出したがない〕(1)</li> <li>・事例に対する捉え方に差がある(2)。</li> <li>・教職員間で考え方が異なりまとまりがない(3)。</li> <li>・教員と協議したりや話す時間の確保(4)。</li> <li>・SCとの連携(1)</li> <li>・支援会の持ち方や内容の充実(4)。</li> <li>・教職員間の情報共有(2)。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SSWが、まだまだ学校現場に理解されていない、浸透していない。</li> <li>・教員との関係づくりに困難を感じているSSWが多い。特に派遣方式のSSWにその傾向が強い。</li> <li>・支援会(ケース会)が学校に根付いていない、うまく機能していないと感じているSSWが多い。</li> <li>・学校がまとまっていない、支援する意識が弱いと感じているSSWもいる。</li> </ul>

## 11. 関係機関との連携で感じる課題

※ 括弧( )内の数は件数

内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非常勤のため、必要な連絡や調整が適宜できないときがある(4)。</li> <li>・時間の制約があり、直に面談する時間を確保しにくい(1)</li> <li>・SSWの立場で、どこまで依頼し、どこまで話していいのか(1)。</li> <li>・必要な支援や改善の目標などの共有や情報共有(1)。</li> <li>・複数の関係機関が関係するとき、相互の連携のあり方(2)。</li> <li>・複数の関係機関のどこがイニシアティブをとり支援するのか(1)。</li> <li>・関係機関にSSWが認知されていない、認知が弱い(2)。</li> <li>・学校と関係機関との考え方の相違があるときのSSWの立場(2)。</li> <li>・微妙なニュアンスを的確に伝えることの難しさ(1)。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非常勤のため連絡調整や面談の時間確保の難しさが指摘された。</li> <li>・学校だけでなく、関係機関にもSSWの周知や理解が未だ十分でない。</li> <li>・複数の関係機関が連携するときの支援のあり方(支援会の持ち方)の難しさが指摘された。</li> <li>・関係機関、学校、SSWで支援のあり方を具体的にまとめる、理解しあうことの難しさが指摘された。</li> </ul>

## 1 2. S S Wとしての支援で印象に残っている事例

内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援会がうまく機能して関係機関と学校の連携がうまくいった事例。</li> <li>・ ケースに応じた適切な支援機関の検討そして連携の事例。</li> <li>・ S S W同士が連携した事例。</li> <li>・ 学校との連携の事例。</li> <li>・ 不登校や引きこもり（子ども、親子関係、保護者サポート）の事例。</li> </ul>
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援会を通じた連携やS S Wの個別の支援で改善がみられた事例だけでなく、連携がうまくいかなかった事例、なかなか進展しなかった事例も示された。</li> <li>・ 関係する学校のS S W同士が互いに連携して子どもや保護者を支援した事例も示された。</li> </ul>

## 1 3. S S Wの活動やそれを取り巻く状況についての意見や課題など

内 容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ S S Wの専門性が発揮しやすい勤務形態や勤務時間（7）。 〔非常勤・常勤、勤務時間、回数、各校にS S W〕</li> <li>・ S S Wへの理解やその周知〔学校・教職員だけでなく関係機関へも〕（4）。</li> <li>・ 学校や関係機関との信頼関係を築くことの大切さ（3）。</li> <li>・ 学校の閉鎖性やまとまりの課題（2）。</li> <li>・ S S Wの身分保障〔雇用関係、社会保障〕（2）。</li> </ul>
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在の勤務形態では時間が少なく十分な支援活動ができないという意見が出された。</li> <li>・ S S Wへの理解やその周知が学校だけでなく関係機関でも不十分であり、信頼関係を作っていくことの困難さが示された。</li> <li>・ S S Wの身分保障への不安さの指摘があった。</li> </ul>

※ 括弧（ ）内の数は件数

## 全体としてのまとめ

1. S S Wの勤務形態は派遣方式や巡回方式が多く、単独校方式は未だ少ない。
2. 効果的な支援を行うには現在の時間では足りないと感じているS S Wが多い。
3. S S Wについての理解が学校だけでなく関係機関も含めて十分でないという指摘が多かった。
4. 学校で管理職と教職員や教員間の考え方の相違、まとまりのなさを感じてS S Wが動きにくくなっているケースもある。
5. 学校の教員や関係機関の担当者との人間関係作りや信頼関係作りに苦慮しているS S Wも多い。
6. 心理的要因はともかく、現象としてS S Wがかかわっている事例では不登校が圧倒的に多い。その次に、派遣方式では子育てや学校と家庭の課題への支援、巡回方式や拠点校方式では別室登校の子どもへの支援が多い。
7. 高校では病院との連携や進路指導についての支援があり、支援する事例の傾向が少し異なる。
8. 支援会がS Cとの連携も含めてうまく機能していない、支援会で具体的な支援策や目標などを検討・決定、共有するという土壌が未だ育っていない面がある。
9. S S Wの身分の不安定さを危惧する意見があった。







## 三者協議会の取り組み

本校では平成27年度より「三者協議会」の取り組みを開始した。導入に際しては、運営委員会、職員会でそれぞれ「三者協議会要項」案を示し了承された。要項では、話し合う内容として(1)授業や進路に関する事、(2)学校生活や規則に関する事、(3)生徒会活動、クラブ活動、ホームルーム活動に関する事、(4)教育環境に関する事、(5)その他と規定している。また、三者協議会で話し合われた内容については、学校運営上の決定権はないが、それぞれの代表が各機関に報告し、よりよい学校づくりのために努力するといった位置づけとした。第1回三者協議会に向けて、「平成26年度学校評価」の結果を生徒会リーダーズ研修や保護者会に知らせ、それについての意見を集約した。ここでは、平成27・28年度の取り組みを紹介する。

### (1) 平成27年度

平成27年11月12日に行われた第1回三者協議会には、生徒6名、保護者等2名、教職員6名が参加した。当日は、トイレの改善や給水器、生徒会掲示板の設置といった施設・設備のこと、ホームデーやハイタッチ運動などの学校行事のこと、そして、「授業プリントの管理が難しい」「定期テストまでの学習の範囲がわかりにくい」「生徒が見通しを持てるような授業が必要」といった、授業に関する事についても活発な意見が出された。出された意見については、トイレの改善や生徒会掲示板の設置といったすぐに対応できることについては実現した。そして、平成28年度に向けて生徒対象の「授業アンケート」を実施し、それを次回の「三者協議会」で議論することとなっている。



### (2) 平成28年度

2回目となる平成28年度第1回三者協議会は、5月26日に行われ、生徒4名、保護者等1名、教職員7名が参加した。当日は、熊本地震への支援やフリールームへのポットの設置の要望、前述の「授業アンケート」の結果についての意見が出された。とくに、本年度フリールームでスタートしたばかりの「スタディールーム」について、フリールームの趣旨とは合わないのではないか等の意見が出され、その後職員会の議論を経て教室を変更することとなった。一方、ポットの設置については、安全性等の懸念から認められなかった。



平成28年度第2回三者協議会は、11月10日に行われ、生徒10名、保護者等1名、教職員8名が参加した。当日は、生徒会リーダーズ研修での話し合いの結果出された意見として、パンの販売を求める意見が出された。また、「体育祭を実施してほしい」という生徒の意見に対して、「体育祭がないからこの学校に来た」という意見が出されると、「それだったらホームマッチの回数を増やしたらいい」、「学年関係なく(生徒どうしが)かかわる機会を増やしてほしい」というように、議論が展開していった。「平成27年度学校評価」の結果を受けての議論では、授業中のマナーのあり方や、「分かりやすい授業とは何か」といった授業について率直な意見が出された。三者協議会后、担当教員が複数の業者に当たってみたが、パンの校内での販売は困難という結果となった。授業についてはアンケートを取り、次のテーマにしようということになった。



## 調査研究 推進事業 検討会議（協力者）

- 藪添 隆一（京都光華女子大学健康科学部心理学科・教授）  
池 雅之（高知工科大学共通教育教室 健康管理センター・センター長 教授）  
田中 きよむ（高知県立大学社会福祉学部・教授）  
古口 高志（高知大学教育研究部人文社会科学系・准教授）  
加藤 誠之（高知大学教育研究部人文社会科学系・准教授）  
岡林 登志郎（学校法人太平洋学園・監事）

## 基礎学力のための演習用教材作成協力者 村上 俊文

編集 総合学科研究開発委員会

## 参考文献 引用文献

- 児童生徒の教育相談の充実について  
～ 学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり ～  
(教育相談等に関する調査研究協力者会議、文部科学省、2017)
- 高校教育の質の確保・向上にむけて  
(中央教育審議会・初等中等教育分科会高等学校教育部会、文部科学省、2014)
- 心理測定尺度集 I (堀洋道：監修、山本真理子：編、2001)
- 高等学校におけるスクールソーシャルワークの現状と課題  
(朝日華子・鈴木庸裕、福島大学総合研究教育センター、2016)
- スクールソーシャルワーカー養成テキスト  
(日本学校ソーシャルワーク学会、中央法規、2012)
- 教師・SCのための心理教育素材集 (小川康弘、遠見書房、2015)

文部科学省委託（平成27年度～29年度）

多様な学習を支援する高等学校の推進事業 報告書

発行日 平成30年(2018) 3月 1日

発行者 学校法人 太平洋学園 太平洋学園高等学校

〒780-0061 高知県高知市栄田町1丁目3番8号

電話 088-822-3584 FAX 088-822-3585

E-mail taiheiyo@taiheiyo.ed.jp